



人にも劣らぬ 軍馬の友情

野砲六 第一大隊段列

將軍山 牛首山に頑強に抵抗する敵に対し
 夜襲戰政行中の真夜中のことでありました
 我部隊は至嚴なる警戒の下に 第一線に働
 かす 自隊の警戒力は乏しく 福の手でも
 借りた、探左有探でした
 後馬乙福号乙門号の二頭は特別大きな体を
 敵陣にさらしてめたが 不幸にして乙門号
 は道路石側の凹地に待機してめた友軍の蹴
 車と 道路の門に墜落して 身動きも出来
 めぬに存つてゐるのを 暗夜のためた小も
 発見する事が出来ませんでした

かゝる破りの良い相手馬の福号は 友馬の危
 急を攻つて貰はんと 今迄静かにしてゐた
 のが 矢度ヒヒヒヒと 嘶くと共に
 前車の踏板を蹴るやう 前掛をすう等大暴
 れを始めましたのを 車輛の先頭警戒中の
 内田上等兵が知り 逸早く奔りつり制止し
 やうとしますが尚止めず 相手驂馬乙門号
 が墜落してゐるのを知らぬ福に蹴るの
 を上等兵がやつと覺り 直ぐに引上げ福と
 しますすが却々揚りません
 乙福はやたらに聲をたて、騒ぐ その声で
 假眠してゐた戦友達も夢破られ 協力して
 道路上に引揚げると平が出来ました 二頭は
 互に頰をすりすり 高く嘶いて如何にも嬉
 しそうでした
 幸に乙門は無傷でありました 二頭の主人
 吉留上等兵は涙を流して 乙福号に感謝の

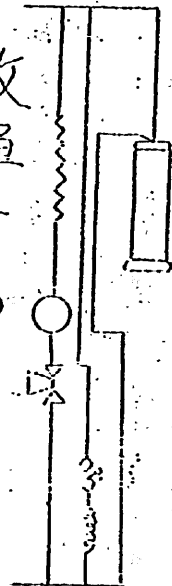
愛撫を續けておました
 戦は進捗して、敵の主陣地を突破し、我隊は安徳門附近に進出、南京城攻勢中、不幸にして又乙門号は左球節に盲管銃剣を受け、全く歩行困難となりました。その時前進命令は下り、直ちに輓馬の配合を終り、乙門は索馬で續行する事になりました。又も反馬を失った乙福は、重い車輻を索いて乙門を呼び下り前進しました。乙門も亦乙福の嘶きに應へつゝ、傷いた脚を下げて三本足で、全身汗に濡れて前進するものでした。斯くして、人馬一体の努力は報ひられ、南京城頭高く日章旗は掲げられました。乙門は療養のため、病馬廠に入療するため出発することになりましたが、却々進まず三本足でジシ廻り、乙福は馬藪を掻き廻るので、仕方なく二頭共索いて行くことに

決めました。
 こうして乙門を入廠したのですが、今度は帰りが大変です。乙門は乙福を求め、乙福は騎手をはね落して乙門に駆けつけ、休む措けつけて別れを借んでみます。二人は串を幾度も繰返して、やっと逆川帰る事不出ました。
 乙門は病馬廠の手厚い看護に快復して、乙福と共に、皇國のために向ひつゝ、下ることが出来る様になりました。
 この二頭の仲睦まじさと、戦友愛は、人にもおとらぬ立派なもので、我隊全員存しく感激したものであります。

(獣醫部提供)



0511



敵弾下の 電話敷設

野砲六ノ二

砲兵軍曹 宇都宮藤夫

敵は南京城第一防禦陣 斗首山の堅陣に據
つて頑強に抵抗を續けてゐます

敵砲弾は其處此處に炸裂します

この時私達通信第一班成班は 歩兵第一線
と連絡を命ぜられ 連日の急行軍の疲れも
足の痛さも忘れて 準備を完了し 観測所
へ急ぎました

歩兵本部の位置に至る 方向と経路を指示

き取ましたので 通信掛と共に電話敷設に
とりかへりました

観測所を下ると同時に 猛烈な機関銃の集

中射を浴せられ 私達は其場に突伏して

低い方にチリノくと匍匐を寄りました

弾丸は前後左右に落下します 漸く低い所

に来た私達は 河の中を渡り クリクラの

中に這入つて 約二時間の後目的地に到着

しました

我隊の連絡掛將校が来て待つておられま

す 早速通信掛を用設して 本部と連絡をと

つてかました 通話は大変苦しみません 電

話さへ通ずれば私達通信掛の任務は半ば全

ふされたのであります 早速はてさて始め

てホッとしました

張りつめてゐた気が多少ゆるんで来ると

さつき水の中に這入つて 煙から下はずぶ

滞りになり 初冬の風に静々と寒気を覚え
ました 敵前で焚火は許されません
太陽は西に傾き 周辺は夕闇に包まれて来
ました 寒さは一層身に沁みる 私ら塹壕
の中はりびこまうて寒さをしのいでゐまし
た

砲弾は近くに轟然たる音と共に炸裂し 破
片は乱れ飛びます 太陽は何時にか姿を没
し すっかり夜になつてしまひました 猛
烈に射つた敵の砲撃も 夜の更けらにっ水
て次第々に数を減じ 砲撃も遠ざかつて
行きます 時折最前線の方で
ウワーッ

と言ふ減撃があたりりの空気を震はして聞え
てきます 歩兵の突撃です それを聞く度
に 存人だが身が引緊る様に感じました
今はもう砲撃はすっかり絶えて 小銃弾が
時々思ひ出した様に飛んで来るばかりです

た
三時頃撤収の命令が来て 暗夜を足探り手
探りの林にして 任務を果して帰ることに
出来ました
戦友達が私達のために残して置いてくれた
飯にかぶりつきました 戦友の有難い友
情が 私達の胸に暖く感ぜられました

電話線は切断された
それ傳遞だと猛攻

野砲六ノ十二

砲兵軍曹

野元 國雄

我精銳部隊は 首都南京の前衛陣地を蹴散
らして 潮の如く南京城に殺到 雨花台附

0513

近に差掛りました

道路には我大部隊が一杯に溢れて、先を競つて前進してゐました。敵は突然その真中に巨弾を浴び始めた。迫撃砲弾、重砲弾が物凄い音をたて、炸裂する。死傷者は續出する。實に悲壯な風景でした。

我中隊は聯隊長直接指揮の下に、直ちにこの敵砲兵の制圧を命ぜられ、陣地進入。正に砲臺を圍ひせんとする時、無念!! 飛来せる敵砲弾のため、通信線は切断せられ、観望所の連絡が、断ち切られてしまふまで。

氣の短い馬場中隊長殿は

「手旗だ、遞傳だッ、早くせんか」と氣狂の林に叫んでおられる。松達は夢中で観測所を飛び出し、立の三合目付近轉り、林に駆け下りました。上を見ると私と中隊長殿との間に森田中隊長殿が居られる。中隊

長殿の命令が次々に傳へられて、第一弾

は正しく発射されました。

「グフーン」

と言ふ炸裂の音が聞えると

「命中」

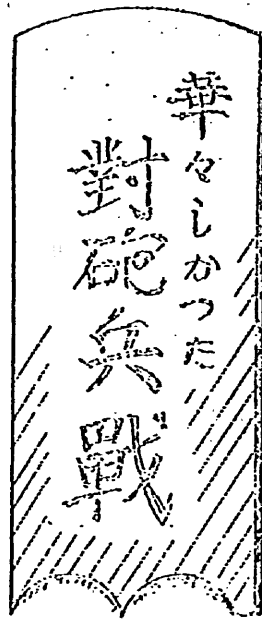
と言つて来た。私は嬉しくなつてしまつ

て、遂に

「それ見ろ、命中だ」

と言つてしまつたら、次の遞傳哨須藤上等兵は喪な顔して同公返す。私はあはれて「命中」と叫ぶと、手を舉げて次に遞傳した。数発射つ間に電話も復旧し、射撃は悉く命中です。やがて敵砲弾の飛来も絶えて、完全に制圧する事が出来ました。その時は重砲隊隊長の乗馬も撃たれて、戦死傷も随分出ました。

戦終つて見ると、手に野茨が二ヶ所、つておりました。聲もすっかり喪つておりました。



野砲六ノ十二 田代 少尉

將軍山 牛首山の敵堅陣を撃破して 十二月十日の寒月の淡い光を浴びて 蕪湖の南 京中山路上に殺到しました

十米幅員の路上を「我こそ一番乗り」と非戦陣員這一杯に溢れて 先を競って前進してあまりました

あまりの大部隊に前進は遅々として、株らず 時間は刻々に過ぎ去ります

敵はこの雲葉する好餌を食んで見逃さず、さう、壕塞砲は我前進を阻んで猛烈に火を吐き、死者狂ひの釣瓶殺手を浴せかけました

た 砲弾は唸り、轟然たる炸裂と共に、そこ

こに 死傷者が續出します

と 松達は順を逐ふて前進を待機して居ります

よし 右側毒原に陣地進入 敵砲兵を撲滅せ

との命令を受け、直ちに陣地進入しました

中隊長殿は敵猛火の中を、前方高地に躍

進せられました

上海から 南京へ と 約一ヶ月間

血の惨劇を繰り返したのは何のため

か、今この要塞を破るため、一発でも巨弾

を打込人で、南京城最後の姿を見たい、そ

して死にたいとは、誰しもの希であつた

よう、この敵砲兵を一騎討するのだ

私達は心の中で堅く誓ひながら射撃を命令

を待ちました

敵の猛射は刻一刻はげしくなつて来ます
前進する部隊の真中に命中する弾は、悲痛
悲惨、眼を掩ふばかりでした
砲聲を縫ふて聞える、天皇陛下萬歳の声
嗚呼、何といふ悲惨な叫びでありませう
私達の胸は千切られ様です
憤怒は沸々とたぎり
この敵砲兵を撲滅して、戦友の仇を報ず
る者は、我々砲兵より他にないのだ、見
てみてくれよ、戦友
と心で泣いて誓ひました、命令は下つた
うらやみ巨弾は砲口より吐出され、頼もしい
唸をひいて敵陣に飛んで行く、精度良好
一弾は一弾と精度を増し
命令だ、
萬歳の声は期せずして湧き上りました
彼我両軍の巨弾は空中で唸を發して交錯し
火花を散らします

友軍砲の發射音に混じつて、附近に炸裂す
る敵砲聲の轟音は、百雷一時に落下する様
なすさまじさです、空氣は絶えず、ロリピ
リと震へてゐる
路上で鮮血にまみれた負傷者抱いた戦友は
片手をあげて
オーイ、この負傷者は俺の戦友だ、仇を
とつてくれよ
血を吐く杯を聲で絶叫しておきました
飛來する敵砲聲、今は完全に頭から消へ
去つてしまひました
銃撃は汗みどろになつて活躍します
敵砲は次々に制圧され、激戦二時間半、遂
に敵の死者狂ひの砲火は沈黙しました
砲撃を止めた私達も、路上にある他部隊の
兵隊達も、未だ覚めやらぬ興奮と感激に打
ち震へつゝ、何回も、
萬歳を叫びつ
づけました

0516

70

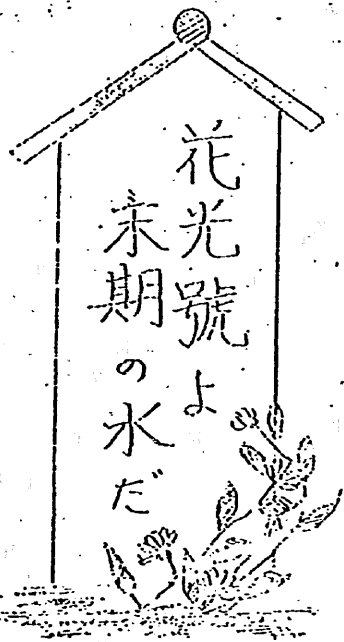
夕陽はあたりきり、寒氣にヒシ／＼と身
に沁みて来る。南京城の上空には銀星がニ
ツ三ツ、キラ／＼と輝いてゐた。遠くで
は銃聲がひっきりなしにしておます。そこ
こゝに焚火が見え始めました。

誰言ふとなく

「火を消せ」

又砲音を受けるぞ

と焚火禁制の遮牌が、寒風につて次から
次へと路上を流れて行きました。



野砲六、第二中隊

彼の南京攻畧の第二日目の出来事でありま

す。敵が大峻に據つて頑強に抵抗すること
は、今迄の戦斗にその比を見ません。小銃
機関銃弾は勿論、山砲野砲、要塞砲弾は雨
霰と霰霏し、人馬の身をかくす所もあらず
せんでした。

丁度此の時、ビュンと氣味悪き音を残して

吾々の頭上を掠めたと思ふと、五十米程

後方に落下炸裂しました。と同時に一頭の

馬がドゥツと打ち倒れました。

やられた。と走り寄つて見れば、花光号の

前肢と後肢はホッキリ打折られ、出血甚だ

しく、苦しむうちに呻いておます。私けわ水

を忘れて、暫し果然と立ちすくんでおまし

た。馬は苦しい中にも細目を開け、懐しこ

うに私を見て何か言ふたげにしておます。

「やつと我に返つた私は

末期の水が欲しいのか、すぐ飲ましてや
らうぞ。」

0517

71

と、クリークに一散に馳せ、足の下に
ももどか、リグに持ち帰り

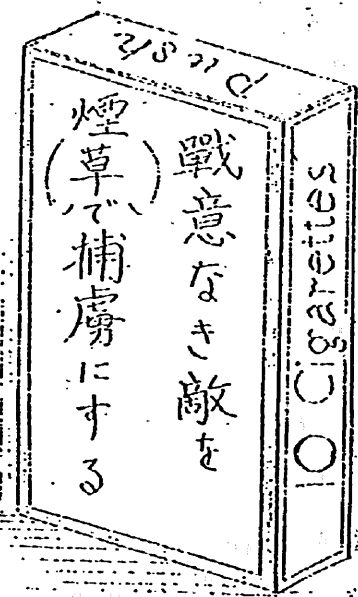
「カー、飲め」

と口元まで選んでやれば、今はもう力盡きて、
唯、大きな息をすまばかりです。可愛想
に、愛馬花光号はもう末期の太さへ飲まうは
ほろい、その力を添へてやるが、一口なりと
飲んでくれ、と頸をグツとか、えて助かす
れば、誠天に通じたか、苦しい中に二度三
度、一度と喉をならして、飲み込み、又グツ
タリとなり、満足したのか、雨風を静かに
閉ぢ、息も又次第に細くなり、遂に帰りぬ旅
に公ました

出征以来五ヶ月、蒼巖、共に苦勞した花光
號の靈よ、安らかにおまれと祈りました

(獸醫部提供)

☆



野砲六ノ十二

輜重兵上等兵 長井 敏夫

昭和十二年十二月十日午前十一時、乗車
走で南京城を距ること一里位の一小部落に
到着し、直ちに前面の頑敵に巨砲を浴せま
した

私達は戦場の一寸の暇を見て、水筒、筒付
をやることに存りました。併し中隊指揮班
の馬燈は輜重車に積んであつて、未だその
輜重車が来ておません

0518

72

人家に探しに行く事になり 私と有馬一等
兵は道路より三四百歩はなれた人家に出掛
けました 騎銃一つを肩に 敏察した葦を
抑分り 進みました

彼我の砲声は般々と響き渡ってゐます 時
折流弾が葦を縫ふて飛来しました

ジク／＼と濕った土を踏みしめ 三百
歩も来た頃は 葦原は盡きて 十米前方に
ばや、大きなクリークが見えました 人家
はその向ふです

早く行かなければと思つて クリークの岸
まで足を早めて出ました と有馬が突然

「敵がおるッ 敵が」

と叫んで パツと伏せました

私もパツとして 葦中で倒れる様に身を伏
せました

ソツと頭を上げてみると クリークの端に
敵の正規兵が十数名 機関銃 小銃をこすり

に向けてゐます 敵は私達を知つてゐる程
です 私はずぐ頭を引込めました 私達は
ジリ／＼と二三米退り 始めて顔を見合せ
ました

有馬がいやに深刻な顔をしてゐます 私の
顔もさうだつたでせう

一つの騎銃ではどうしようもありません
敵との巨離は クリークを一つ距てゝゐる
だけです

一分二分無氣味な沈黙がつゞきました 今
射つだらう 今射つだらう と一刻の後の
状景を想像して 覺悟を決め 華々しく死
ぬのだ と考へてゐました

有馬は引鉄に指を掛け 私は銃剣の柄をし
っかり握りしめてゐました 敵はまだ射つ
て来ません

二人は半ば危懼を抱きながらも いくらか氣
持の中とりを待つて来ました

「彼奴等は敵意を持ってゐるらしいぞ、
何とかがして捕虜にしたいなあ。」

と小声で話し合ひました。

そして充分注意を下さう。二人共少しづつ、
体を露出して、わざと彼等の目に付く様に

銃を傍に置いて、一歩近く小銃を持ってゐ
る奴に

「你、來々。」

とやさしく呼びかけ、敵意がない事を示し
ました。敵兵が遂に私達を降参したと思ひ
はしないかと心配し下さう。

するとその支那兵は、他の兵隊を見廻して
一寸躊躇した様ですが、立ち上つて銃を重
さうに提げて、「ノコノコ」と私達の方にやつ

て來ます。他の奴等は黙つてそれを見てお
ます。

私は半分その兵を見、半分は他の奴の方に
注意を下さう。煙草をとり出してその一本を

「給你 香煙」 (煙草をやる)

と差し出すと、かすかに頭を下げて黙つ
て、それを左手で受取りました。

この様子を見た残つた奴等は、何かかヤガ
ヤ言つてゐましたが、私達が

「都 恭維」 (皆來い)

と言ふと、一人立ち、二人立ちして全部
口を口やつて來ます。

私達は「いめた」と心の中で叫び下り、煙
草を一本宛分けてやりました。

その時は、私達はすっかり敵兵といふ考へ
を捨て、良民に対する存心を持てた。

彼等は私達の厚意ある態度に安心した様に
煙草に火をつけ下り、口々に「ベチャ」

と言ひます。私達はよく判りません
でした。殺しはせぬか? といふ意味らしい

ので、「うん」と頭を堅に動かし下り
「死了 沒有」 (殺しはせぬ)

等と怪しげな支那語?で安心させてやり
 武器を全部一ヶ所に集めさせた。彼等
 は少しの懸念もない様に、我先にと持つて
 参りました
 私達二人では持てませんので、強さう后奴
 三名に持たして、それ先頭を一列に付し
 て帰途につきました
 葦の中を行く時は、逃げはしないだらうか
 反抗はせぬかと監視を怠りませんでした
 潜くして葦原を出て、中隊が見える様に居
 つて始めてホッとして、今度は意気揚々と
 彼等を急たて、中隊に急ぎました
 附近に居る葦原の兵隊達が、捕虜の姿を見
 てバラ／＼と駆け寄り、私達の止めるのを
 聞かばこそ、頭をた、いたりなにする兵隊
 がありました。皆殺氣立つてみましたから
 無理もありませぬ
 煙草の煙で捕虜にした十六名は無事に中

隊に引渡すことが出来ました。彼等は其後
 實によく我々の爲に働いてくれました。



野砲六、聯隊段列
 砲兵連曹 米満佐市

十二月十日 我藤村部隊の先峰隊は既に安
 徳門附近に砲列を推進して居りました
 私達段列は彈藥補充のため、小米行に向つ
 て急進しました
 敵砲弾は不気味な音をたて、飛來し、遠く
 に近くに轟然たる爆音と共に炸裂しま

す

砲列は敵真前にて彈藥不足で困つてゐるであらう。一發でも早く彈藥を補給して砲の威力を増強しなけりばならぬ。早く／＼と氣は急ぐけれど、破壊された橋梁に阻まれ、水々意の如く前進することが出来ませんでした。

我こそは一番乗りと十米位の牽道を野重、戰車と三銃隊に任せて、先を競つて前進します。

連日の行軍の疲れ等何處に吹籠んだか、皆の顔は必死です。只念頭にあるのは南京城攻めだけでした。

十一時三十分頃でした。頭上高く飛ぶ流弾に交いつて、二發、三發、四發と数を増すごとに、敵砲彈が弾着が私達の後方に、極めて的確に落下し始めました。

敵は私達を常見した称です。

「オ、イ、戦友、油断するな、彈丸は近づく、と力強く叫ぶ声が、砲彈炸裂の間に、／＼に聞えて来ます。

その時です!!
ブルン／＼と迫る砲彈特有の風を、切らぬ唸りが聞えたかと思ふと、

「ドカーン」轟然たる音響と共に、左前方五間程のクリーク端に炸裂しました。吹飛ばされる土塊と共に、「シュー」と破片が身をかすめます。

「失敗った、やられたッ」と感ずると共に走馬燈の様に、父母の顔が眼に浮んだ。そして何事も無いのに気がついて、一瞬ホッと胸を撫で下した。

ふと傍を見ると、硝煙の間に畦地上等兵が倒れてゐる。

「畦地がやられた」

一同一語に心と矢に撃ち寄って

睦地じつかりせよ

と力をつけるよ 蒼きめてゆく苦しさを顔
で見廻して それが戦友であることを知る

と

「ス 清まぬ 俺の傷は浅い オオ 俺の

馬は大丈夫かし

瞬間私達は ハツと胸をうたれました

「大丈夫だ 心配するな」

と答へる戦友の声は涙で曇っておきました

睦地上等兵はそれを聞いて 安心した様な

微笑が唇を口元に浮べると ジリ／＼と

重傷の身を三間もはなれてゐる愛馬のこ

ろにじり寄り寄って行くのでした

感激にうたれた私達は それを見つ 手助け

する事も 手當することすら忘れて見守つて

おました

やがて 愛馬に近づいた彼は 前肢を右手

で抱き 左手で撫で下り

「よかつたな あ 怪我がなくてよかつたな

あ

と 涙を一杯溜めながら 愛馬の無事を喜

んでゐるのでした

嗚呼!! なんと床しい武人の心根でせう

私達は不覚にも流氷落する涙をどうするこ

とも出来ませんでした

かえりみますれば 杭州湾上陸以来 泥濘患

路と闘ひ 糧秣に苦しみ 只南京へ

と 南京城陥落を唯一の楽しみ前に前進して

来て その南京城を目前に下り 後退し

なければならぬ 睦地上等兵の胸中は如何

ばかりだったでせう

そして 勞苦を共にした愛馬と別れをりれば

行らぬとは

彼は愛馬の無事を喜ぶ下り 仇討つて

く水と心の中で叫んでゐたでせう

0523

心あまが 烏は温かしく後りたすまへに任
 せて 悲しげに低く鼻を鳴らしてゐます
 やがて衛隊に依つて 後方野戦病院に
 運ばれて行く陸地上等兵を見送る私達は
 誰一人として口を開く者もなく 両眼に一
 杯涙を溜めてゐました そして
 「さつと仇は討つぞ」
 と口の中を指さしたのでした
 それより後 即ち昭和十二年十二月十二日
 午後四時二十分 我指銃部隊に依つて南京
 城頭高く翻翻と感激の日章旗が翻りました
 私達はそれを見て 故國へもどけとばかり
 萬歳を三唱しました



一本の煙草を分けた
 戦友は間もなく敵死す

野砲六ノ八

砲兵軍曹 坂本 盛太

連日の強行軍が酬らる 昭和十二年十二
 月十日一三〇〇 中隊は王家鎮附近鉄道沿
 線の畑中に放列を布き 射撃を開始しまし
 た
 此の日 私放列勤務の通信中でした 小
 さな小屋がありましたので 其の壁を利用
 し 電話機には附立の割燧瓦を架めて回ら
 せ 受話器をしっかりと握つておきました
 其の頃友軍の一線は七八百米前方にあり

0524

78

ました 中隊が射撃を始めると 敵もさるもの 我陣地を發見したらしく 砲列の前後には敵砲弾が熾んに飛來し始めました 戦は愈々激しく 小銃 大砲の射撃の音や 炸裂の響きで 號令傳達に誤り無き様變命でした

折柄一弾は私共の小屋に命中し 第一小隊長殿と共に いやといふ程土砂をかぶりました 更に四五分すると 約三米背後に二發續いて彈着しましたが 幸にも不發でした 暫くすると徒歩通信手首藤上等兵が晝食を持つて来てくれました 意外にも黒砂糖をまめいた小麦團子で 何よりの御馳走と腹一杯詰め込みました 此頃煙草もない時でした 私は南京城攻畧の御祝にと 大串に一本持つてゐましたが 此頃杯辱丸を潜つて來た首藤上等兵の顔を見ると 急に

煙草が欲しくなりましたので 二人で分けてのびました 上等兵は昨日から口には煙草の草で子供の様に喜びました 同様に首藤上等兵は 彈藥補充の連絡に段列に行くことになり 敵陣雨霰の中を勇んで出發しました そこから二十分程すると 段列の連絡兵が途中で 敵陣に斃れた首藤上等兵の死体を發見 彼方に收容したと聞きました 先刻迄共に談笑し 一本の煙草を分けて吸った 戦友を失つた言ひ杯辱丸の敵愾心が ちり／＼と滲りて來るものでした 二一〇〇 首藤上等兵の遺骸に対し 生前の勲を語へる 中隊長殿の慈愛深い言葉の後 隊員一同肅然として 嚴かな別式が行はれました 式後明掃戦の準備を整へ 假眠の床に就きました 晝間の上等兵の姿が隠裡に去來して 容易に眠りませんでした



野砲六ノ二 小森園 久雄

南京陥落の前夜 連絡將校倉田少尉殿の指揮で 某軍曹殿と歩兵四十七聯隊の本隊は連絡に行きました

あたりは真暗で道はさっぱり判らぬ 聯隊本部が何處にあるのか 敵弾は容赦なく私達の身辺に落下します 低い所を選人で敵弾を避けながら 約五時間捜し廻りました どうしてもわかりません 倉田少尉殿は歩き廻って疲れた私達を氣遣

「一體して元氣を出して捜さう 明方迄は どうしても連絡して帰らねばならぬ」と小休止を命ぜられました 私達は膝を下してみると 連日の戦斗や行軍の疲れが一度に出て 今にも眠りさうになります そして又倉田少尉に励まされて 捜しにかかりました

闇の敵弾下ま約一時間も 此處彼處と捜し廻り 前方に歩哨が立つてゐるのに気が付き 聯隊本部を探してみると そこは四七の一大隊本部で まだずつと後方だと言ふので少し迷ひ遣つて漸く連絡の任務を達した時は 出発後七時間も経つてゐました 私達は何時も第一線に距れた處で戦つるので その夜程敵弾を身近かに聞いたことはありませんでした

噫 藤井隊長

野砲六ノ第二中隊 座談會

勝尾曹長

激戦を極めた首都南京に 我が藤井隊長
殿が逝かれて早二年有半 斯の壯烈な御戦
死を偲ぶ時 感慨更に新たなるものがあ
ります

然し 在りし日の隊長殿の御精神は 今尚
中隊の精神として 東亞の建設に踐行され
つゝあります
では諸君 忌憚なく話して下さい

矢野軍曹

昭和十二年十一月二十八日 團枝支隊の
配属を解かれ 原隊復帰のため不眠不休の
急行軍で 〝南京だ 〝と四湖
面白く口吟ながら 一日に二十四里突破し
て 本隊の後を前進しました

久木山軍曹

溧水を通過したのは十二月七日の晝すぎ
でした 長谷川部隊の軍旗が自動車で疾行
して行きましたか 話に依ると 南京は既
に陥落したので 入城式に間に合ふ様には急
ぐのだとこのことで 折角毎日の行軍が張
合がなくなりました

勝尾曹長

夜行軍に中隊長殿が下馬され 當番兵
を乗せられて 御自分も徒歩で行かれた事

0527

81

もありました

山本伍長

私が足に大きなマメが出来て、びつこき
みぎく行軍するのを見らるゝ無理に乗
せられました。非常に部下思ひの隊長でし
た。當時を偲べば感慨無量です

久木山軍曹

重歩で主力に追及したのは、東善橋でした
この附近は南京防禦第一線陣地で、銃砲声
が盛んに聞えます。各部隊の混雑の中を迫
撃砲弾を潜って推進しました

矢野軍曹

第一回陣地進入の時、あれ程迫撃砲弾を
受けながらも、段列に居た人馬に被害を受け
なかつたのは、寧ろ不思議なくらいでした

佐藤(待)軍曹

夜は霧に露が降りましたが、葉の多いの
に委せて、燃張って集めた葉を天幕の下に
積み重ねて、露管の夢を逃つてゐますと
ローソクの灯が葉について、火災をふこし
て大騒ぎでした

米丸軍曹

夜明けと共に大隊が陣地を推進しました
んで、中隊もつゞいて前進。牛首山腹より
掃射するエッコの洗礼を受けながら、陣
地を推進しましたが、迫撃砲、山砲弾はさ
かんに道路の両側に飛来しました

西村上等兵

放列を布置した時も、放列、段列の区別
なく迫撃砲弾が飛来して、物凄く音で炸裂
して実に壯烈でした

佐藤(信)軍曹

藤井隊長殿が親側所の壕の中で 靴パンを食ひながら 飛來した敵の小銃弾を拾ひ上げ、ソラ 弾が來たぞ」と言つて皆に見せられたいので大笑ひしました

勝尾曹長

眼鏡片手に塹壕より半身を乗出して 射薬指揮を當りぬるので 隊長殿 危険です」と言へば、なかに 僕は小さいから大丈夫だ」と平気で居りました

小湊軍曹

夕食の準備中迫雷砲弾に見舞われ 今炊き上げればかりの釜の中に土砂が一抔入つて 折角の飯も又炊き道しましたが あの時、突に猛烈に罷んで來ました

米丸軍曹

この陣地の敵は実に勇敢で 野砲の集中射を行へば蜘蛛の子を散らす様に姿を消し、暫くすると何時の間にか陣地に就いて、日中頑強に抵抗しましたが 夜に入つて歩兵が前進するに、小て やつと退却しました

西村上等兵

そのまゝ、陣地露營でしたが 突然の命令で午前一時出発 水口部附近に集結しましたが 火災を起してせかんに燃え、最中でした 中隊が停止したところは 丁度敵の彈藥集積所で 既に彈藥箱に炎火しておきました 危険な所で段列は後方で停止しました 曹長、すうと物音が、爆音と共に 彈藥箱が破裂して その破片がビュン、中天を唸り渡りました

勝尾曹長

其處を切り抜けて前進す。然る橋部着に着いたのは午前四時頃であった。大休止してあります。藤平隊長殿が突然「豚も捕えろ」と叫び出したので一斉に豚捕りが始まりました。

山本伍長

本營に暇好きの方で、行軍中でも御自分の手料理で、豚の塩焼を一番喜んで食って居りました。豚さへあれば食物には心配のない隊長殿でした。

久木山軍曹

欽心橋より前進する際、歩兵の第一線より前に推進して、〇〇旅團長閣下より御目玉を頂戴しましたが、無理もありません。奔へて見ると冒険すぎた極です。どんな障壁があってもわらなはし、何處に敵が潜

んであるかわかりません。

大野軍曹

同じく第三分隊を指揮して本道より左に第二分隊は大隊副官殿が指揮されて、本道の右側に推進しました。敵者は頭を上げられなごらぬ敵弾の飛来する中を、勇敢に前進しました。魚雷砲弾が左右に炸裂する中、敵陣地目懸けて巨砲を浴せました。突に痛快でした。

小湊軍曹

此の敵を制圧して、第二分隊より乾パンと黒砂糖を両手に抱へて来られた隊長殿が「ニコ／＼笑ひながら、オイ、元氣を出せ、乾パンだ」と乾パンに食はして、兵隊を喜ばせておられました。不眠不休で腹ペコペコだった私も、教団の乾パンを戴いて食つ

0530

84

て居ますと、其の真中に迫撃砲弾が炸裂し、又一同は土砂を頭の上からかぶりました。折角の砂濺が文字通りの砂濺に成つてしまふました。

勝尾曹長

その夜、^命金家四部落で露営の際、工兵隊が安徳門破壊の決死隊の水蓋の決別を、山本佐長誌してくれ。

山本佐長

竹梯子、縄梯子とダイナマイト等を準備して、水蓋を出発しました。この軍曹の仇は必ず討つてやる。成功しなれば二度と帰って来ぬぞ。天皇陛下萬才。等と元氣よく語つてゐました。最後に一同が代を合唱して出発しました。あの夜には泣かされた。実に悲壯なものでした。

勝尾曹長

曙の午前五時三十分頃、藤井隊長殿は大隊長殿のところに呼ばれて、命令を受け、第一分隊を作業隊に命じて、朝食もせずに、工中軍曹を連立、昨日偵察したあつた陣地に先行さしました。

久木山軍曹

通信手も第一分隊と作業隊と共に出発しました。何となく隊長殿の命は何時にも敵へると、急いで居た様子は思はれませんでした。八時二十分頃陣地進入路及陣地の工事を終へ、臂力陣地進入を完了しました。

佐藤軍曹

此の頃既に敵の射撃を受け、銃砲弾は陣地附近に雨の如く注がれてゐました。其の中に茫然と砲隊銃に寄り、至近距離の掩蓋

0531

機関銃を片端から狙撃的破壊し、最後の掩蓋に射向を換へ、「セツ右へ以」の号令をかり、海に砲隊鏡に就かんとした利那、ンパンノと飛来した機関銃弾は、中隊長の右胸部を貫通、ウ、ム、と叫ばれ、其場に倒れ小まされた。

勝尾曹長

首藤一等兵が、中隊長殿、中隊長殿と再三叫んでヒリナかりました。何とも答へられず、せんでした。

兒玉大隊長殿が、藤井君、藤井君と抱き起された有様が、忘れられませぬ。直ちに軍医殿を招いて、カンフル注射を教本しました。既に隊長の尊い生命は南京城攻塞の魁となり、護口の神と化してゐられました。時は十一月午前九時でした。

山本佐長

手裏口等の隙に這つておられた南京城を、せめて一目見せて残存せよとつた。その小のみ歩へてのすす。其の夜大隊の集合地たる菊花園に、靈柩を運び、大隊内へ心ばかりの慰霊祭を行ひ、茶罷に附しました。

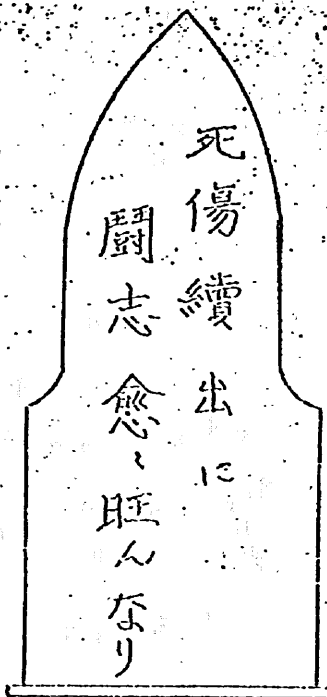
佐藤曹長

明け十二日は南京城陥落の日。早朝より遺骨を捧げて陣地に行き、十三野三十分城頭高く日章旗が翻るや、目をうろたせ下り

中隊長殿、南京城であります。あの日章旗が見えますか。

と白木の柩を肩より高く差上げて、男泣きに泣いた。山本一等兵の姿がけつきり、臉に汗を流す。山本佐長

更に十二月十七日、光輝ある南京入城式には、分骨を捧げて参列しました。



野砲六ノ三

砲兵軍曹 安達 利男

私達の中隊は十二月八日 牛首山の少し手
前の道路上に到着し 早速命令に依り陣地
進入し 歩兵の第一線部隊に協力したので
あります
其の夜は現在地に於て 至巖なる意成程
に夜を明かし 翌九日牛首山攻塞に敵の密
着出下砲撃は 陣地の前後左右に飛來しま
した その時中隊は敵の観測所を発見し

之を制圧したため 其の後はいり弾丸も飛
んで来ませんでした 午後九時頃私の分
隊長吉田運曹殿が頭傷され 介隊長を失
しました

暫くして陣地を交換しましたが 途中敵の
彈藥庫に火がついたらしく 盛んに砲撃小
銃弾が破裂しておきました 夜軍歩兵は左右
の山を前進してあります 我が中隊も方々
急進して 十日の朝は南京前方五料の地兵
に到着しました
其の夜鉄心橋と言ふ處に待機中 工兵隊の
勇ましい軍歌が聞えて来ました 二人が工
兵が

「藪馬索を一本下さいませんか」
と言ふます 私に兵器の員数だとは思ひま
したか 今夜工兵は南京城門を破壊するた
めの綱梯子を作る事の事でした 私の後には
固うと思ひ下りも興へました 工兵は必死

0533

の覚悟です 夜遅く迄戦友同樂つて 軍歌
も唱つたり 俺が死んだら骨を頼むぞ等と
話してゐました
私はこの時 しみづく 工兵隊の存亡味を感じ
ました 工兵隊が居てこそ 歩兵の突撃路
も 又野砲の前進にも 遺憾がないと思ひな
がり 連日の戦斗と追索に疲れた体は 何
時しか眠つてしまふさうした
十一日の午前七時頃 敵の發射する砲聲は
私達の居る飲心橋の部落に飛来しまして
歩兵が二三名戦死しました 其時私は
心の中で 確かに戦友の仇は討つぞと誓ひ
ました
八時頃 小隊長花原見習士官殿が来られ
今日は愈々南京城を占領する日だ
と言はれました 同となく命に依り 私の
分隊だけ先行する事に依り 十時頃陸地に
到着しましたが 前進途中私達處等は互に

佐治氏急を言いつて取換へて下さい
準備は済ませや 嚙み出す砲聲は百發百中 敵
はかき乱れて退却を始めました 一線り歩
兵は時を移さず前進 立射 魚射 其の日
覺しいこと 筆書に表すことも出来ずせん
暫くして陣地を換へました 其の寸前
に細刻小隊長負傷 次いで宮本上等兵戦死
内田一等兵負傷 私も左腕に軽傷を負いま
したか 小隊は追索前進し 南京城を眼下
に見た時は 警へ林の下の橋を渡りて一杯で
した
期くれば十二日 愈々南京城攻襲となりま
して 山砲 野砲 重砲 加農砲等の一
斉射響に呼應して 飛行機が勇敢なる空
爆に依り さしもの南京城も遂に陥ち 十
二時すぎには日章旗が城壁に上りました
私共は思はず 萬歳と々と絶叫しました



友軍機の活躍

野砲六ノ六

砲兵軍曹 島田 正義

南京の手前約四里 司徒村附近に陣地を占領したのは十二月八日でした

此の時既に敵の砲陣は断続的に放列の上空を掠めて、後方の中隊段列附近に落下して

みました

我が部隊も熾んに砲火を浴せましたか 南京

の護りは固く 敵はなかく退却させ

ん

夜は夕日に露営して翌日は約千米前進

私は觀測所に行き 中隊長殿の命を待ちま

したが、なほ、に敵の陣地を見ますと

チヨロ 〱 と動くのが手にとる様に見えます

大隊の砲門は一斉に開かれました 砲音は

天地に轟き 般々として小河を震はし見

る 〱 うちに敵陣は砲煙に包まれました

更に巨弾を浴せこの敵を棄退しました

十二月十二日 小行鎮より乗車にて遠歩前

進 南京城約一里の地矣に逸出しました

と 重砲 野砲 輜重車等自動も出来存

い程押寄せてゐます 南京城陥落との報に

我先にと押進ったとのことでした 約三

十分もすると敵砲弾が一發飛来したのをき

っかけに この身動きも出来ぬ程詰寄つた

路上部隊目懸けて 雨霰が如く注がれまし

た 弾着も逐次正確になり 前方では既に

犠牲者が出たらしく見受けられます

親馬を解け

中隊長殿の命令です

然し身動とも出来ぬこの場でどうなること
かと心配してうちに敵砲弾の落下がはた
と止まりました 不思議に思つて敵空を見ま
すと 爆音もいと軽るやかに飛行機が旋回
してゐます

友軍機だ 占めたッ

と喜びも暫し 飛行機の回にはバツ／＼
と無敵の白煙が破裂します 友達が ハラ
ハラし下う どうぞあたうない様になつと念
する甲斐もなく その中の一機が機首を地
底に突込を抹殺で墜落しました

ハッやられた 私が眠をせうしたその
瞬間 グウィーンと不気味な音響に思はず
顔を上りと 墜落と思つた飛行機が飛
かな爆音をたて、上昇してゐるだけあり
ませんか

「ワーツ やつた」

とこの喜劇詰り部隊は奮然して喜びました

私達を恐怖の底に突墜した敵砲兵は今頃木
ツ葉微塵になつてゐることでもせう
幾多の損害を蒙る直前に 僅か一發の爆弾
で敵を制した 捨身の急降下友軍機を感
激の瞳で見送るのでした

同胞の危めり祖国にも響りよと

曉の曠野に五ヶ條鳴ふ

一満史一

故郷に吾を待つ女のありがたさ

今日もといまぬこの珍らしき品

一満史一

野砲六ノ二 澤樂より

0536

90

歩兵大隊長殿の御



温情に心から感謝

野砲六ノ三

砲兵軍曹

久保田 廣

南京の敵第一線防禦陣地を突破し十二月十日には本陣地に迫りました。當日は大火して敵陣を受けませんでした。

敵が敗走の際放火した路側の米倉庫に一夜を明かすことになりましたが、二百俵もありうと思はれる米は、真赤に焼けて傍に寄れば熱くてたまりません。途中で徴發した支那米を炊き、先に通過し

た部隊が殺した水牛の肉をナイフで拾ひ肉飯に焼肉の御馳走で、小隊長殿を中央に明日の戦々想像して、愉快に夕食を終へ戦準備を整へ、警戒を厳にして夜明けを待たました。

明日激戦が展開されるであらう南京城附近は一面に黒いとぼりに包まれ、空には銀星がキラ／＼と輝いておます。時折遠くから銃聲が樹を縫って聞えて来ると、

こからか悲壯な戦友の歌が流れて来ます。決死隊が別れを惜しんでゐるのでせう。身も横たえろと、敵日來の強行軍の痕跡で

何時にか深いおまりに落ちてました。明くれば十一月、前線には銃声がかひ／＼りなにしてあります。敵はきずかひの狙に射

ち捲ります。私達は陣地進入すべく、敵の側射をくぐつて、各個躍進的に前進しました。

砲弾の唸り 掠め飛び小銃弾

前進中の歩兵部隊が幾人かやられる

私は緊張のためブル／＼震へ 敵愾心は脈

々と波うつ 陣地に進入するや 敵の猛射

は一層激しくなり 凹地に集結中の小行李

の真中に炸裂 人馬の死傷は續出します

敵砲兵は何處と 敵陣を望めど前方の高地

のため発見する事が出来ないう 藤崎小隊長

殿は單身歩兵と連絡のため 敵の十字火の

中を前方の台地に 躍進せられました

敵陣は小隊長殿の身邊に無数に落下し ち

まつさへ 敵は盛んに手榴弾を投擲し始め

ました 中隊長殿以下私達の心配は一通で

はありとせんでした

それから約三十分の後 藤崎小尉殿負傷の

報せを受け 私はナツとしてゐる事が出来

ず 中隊長殿は無理に御願して 小隊長殿

の處に走りました

雨の如く降り来る敵陣の中を走り時は

るで無我夢中 幸にかすり馬一ツ受りずし

て 壕の中に移り込みました

小隊長殿は應急の手當を受けて居り小

さいに 氣は割合に確かだけれど 早顔色は

蒼白に変わり 血の色さへ見えません 呼吸

も如何にも苦しさうです こうして置いて

は一大事だ 後方で早く充分な手當を受け

なければ

擔架を求められ小じ 壕には十数名の

負傷者が居ます それに小隊長殿は一番奥

に居られる

苦しさを叫ぶ呻聲！

蒼白顔 鼻を流す血の香！

力づいてゐる戦友の悲壯な聲

涙なくしては見られぬ悲惨な風景です

私は小隊長殿をかたづけたり 擔架の來るのを待ちました やがて四つの擔架が参りました もう四五回後でなければ小隊長殿は運ばれない だん／＼ 氣力は衰へて行きまふ 私に居ても立つても居られない採ら氣持でした

歩兵の大隊長は悲壯な顔で 暫く全部の負傷者を見ておろしましたか 擔架兵に

「砲兵の小隊長に擔架を一つ持つて来い

この人は重傷だから」

と命ぜられました

私はあまりの困難さに 涙がホロ／＼と流れ落ちました そして他の負傷者に相濟ませぬ氣持で一杯でした

運ばれた擔架にすぐ移し 大隊長殿に心から御礼を述べ 別れの挨拶をして 急いで中隊の位置に下りました

待ちかねた小田大尉以下戦友達は 藤崎

小隊長殿を圍んで 悲憤の涙に顔を濡らしました

直ちに一同は弱りゆく小隊長殿を慰め勵ませ 後方から野戦病院に送り 復仇の猛砲撃をつゞけました

約十分位経った頃です 電話機について通話をしてゐた宮本上等兵が 只一言

「ウー」

と言つただけで横に倒れました

私達は思はず聲が寄つて抱き上げ 叫べど返事はなく 皆顔を見合して無念の涙にくれるのでした

宮本上等兵は最後迄任務を完ふし 受話機をしっかりと握つて放しませんでした

中隊一同は二名をも戦友を失ふ 怒り骨髄に徹し 死物狂ひの猛襲をつゞけました

やがて前方高地に歩兵の突撃が敢行され 前面の陣地は完全に我手に歸し 私達も陣

地を喪失するこゝになりましたが、宮本に
等兵の血で染めたその陣地を立去り兼ねま
した

その夜怨を南京城外に留めて散った宮本上
等兵の火葬が行はれました

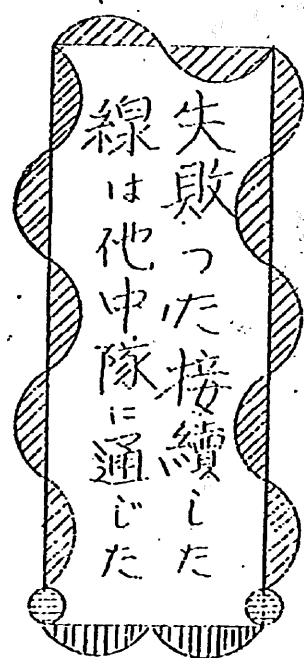
翌日、南京城の一角に感激の日章旗は翻
と翻り、私達は何時迄も、
萬ずるひ

びつ、けました

「宮本上等兵の英霊よ、仇は討ったぞ」

この日徒歩班が到着しましたが、小隊長殿
と宮本上等兵の名前は言へても、その後が
どうしても言へませんでした

今でも其の時の戦友が一緒に集って、その
話が出ますが、何かしら熱いものが感じられ
れてなりません



野砲六八

砲兵軍曹

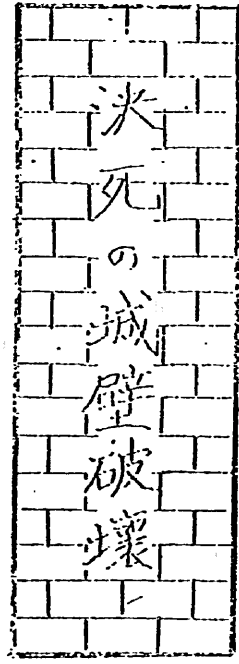
山内益敏

十二月十日 午前五時出発、我高嶺大隊は
敵首都南京を死守する、頑敵を殲滅す
べく、機動挺身人馬一体となり、約三里兼
車速歩で、目的地に放列を布置しました
北支以來ニヶ月振りに聞、弾の音に、今迄
の苦勞も一時に飛び去りました、自分の任
務は観砲用の電話連絡です、放列より観測
所へ一秒を争ふ延線です、小銃、機関銃、

は盛んに飛んで来る。支那軍の遺棄死体を
乗り越へ、鉄條網を潜り、三十分前まで敵
が居た陣地に到着しました。断線と氣にし
乍ら連絡をとり終りますと、直ちに射撃命
令です。敵ながら可成正確な砲弾を物薄く
送っておりましたが、我砲兵の集中射には敵
は難く、此處を最後と頑張った敵も漸次退
却し始まりましたので、約三百米前方の高地
にあり、三階建（元各種試験場）の頂上に
観測所を推進しました。
敵を眼下に俯瞰することば出来ましたが
敵陣は観測所附近にさかんに炸裂します
射撃は突に二時間と三十分を亘りました。
突然電話不通になりましたので、自分は身
命を賭して、通信手の任務を遂行すること
を心に誓ひ、通信下士の命に依り、砲聲の
飛来する中を縫ひつゝ、森戦友と係線に這
出しました。百五十米位り所が敵陣のため

切断されておりました。各中隊の電話線が一
緒で、何本もの線が切断されておりました。
之が中隊の線と思ひ口に接続した瞬間、一
弾が五川位前に唸り生じて土煙を上りまじ
た。森戦友と顔から土砂を被り乍ら、御互
無言の中に無事なるを知り、顔を見合せて
微笑を交しました。
係線の任務を終へ観測所へ引返りましたか
中隊長殿から
「前達は戻らぬだ、自分も線も判らんか」
と叱り飛ばした。
電話は他の中隊に通じておるので、一刻
を争ふ战斗中、斯く失敗を招いたことを深
く恥び乍ら又すぐ観測所を駆け下りて、さ
つきの所に駆けつけ、始めて中隊の線と接
続することが出来ました。その間約十五分
射撃は中止されたのですが、放列との連絡
がとれて、射撃を開始したのは中隊が一番

でした
 観測所で彈の音を聞き取り、如何に急を要する時でも、中隊の線はすぐ判る様に張る必要がある」とこの時、感々感じました



野砲六、十二

砲兵伍長 岡村季政

十二月九日 南京外輪の第一線防禦陣地に
 ぶっつきまゐり
 今迄の疲れはすつきり去りました流石首都
 の第一線でなか／＼頑強です
 彼我の砲聲は殷々として郷音に渡ります死
 斗敷時間 遂に第二線を突破 第三線 第
 三線と次々に占領して 各隊は潮の様に

我先にと南京城に殺到してゐます もう南
 京城陥落も時州の問題です
 十二日五期に總攻撃手が散行さ小ます
 十一日私達の中隊は坊徳川外で 明日の
 準備に一生懸命でした
 中隊長殿は早速敵陣南麓を中隊陣地偵察
 に行か小ました
 敵は闇の中を 死物狂にめくらめつぼうに
 射つて来ます ビュー／＼とつかつきりな
 しに頭上を 身辺を掠めます
 早速小隊長殿指揮のもとに 警戒配置下つ
 き何時でも敵に備へる準備が出来ました
 陣地偵察に小隊中隊長殿が帰つて来
 られた 中隊長がしばらくして悲壯な面持
 で帰つて来ました そして
 どうしても明日の城壁破壊には 城門二
 三百米に達出しなくては任務が務らぬ
 ころ小隊長は砲諸共だ 今から決死隊を募

希望者は出ず

今迄緊張した顔で聞いてゐた兵隊達は、末
だその言葉が終りぬ中に

自分も

と先を争ふて進み出ました

然し全部出ても仕方がない、隊長殿の命令
で一ヶ分隊、砲手は各分隊からの編成でし

た

決死隊に加つた兵隊は大喜びだけれど、そ

れに外れた兵隊達は、いよげ返つて、皆一口
も口を閉かない、愈々拂曉から總攻撃です

私達観測手は観測所にあつて、諸準備を

整へました

城壁は目前に巍然として聳えてゐます

側方、正面から猛烈に小銃弾が飛んで來ま

す、バババン、まるで耳元で射撃し

てゐる様です

私達は今は夢中になつてしまつて、胸を高

鳴らして攻撃命令を待ちました

午前八時頃攻撃が開始されました

巨弾は飛んで城壁に命中、轟然と炸裂する

城壁がグワラ／＼壊れるのが手に取る様

に見える、全く愉快なことだとへ採もあり

ません

戦車防護のもとに第一線歩兵がグ／＼前

進みます

城門は盛んに火焰を上げてゐます

彼我の銃声は天地も揺がせる様です

時正に昭和十二年十二月十二日零時三十分

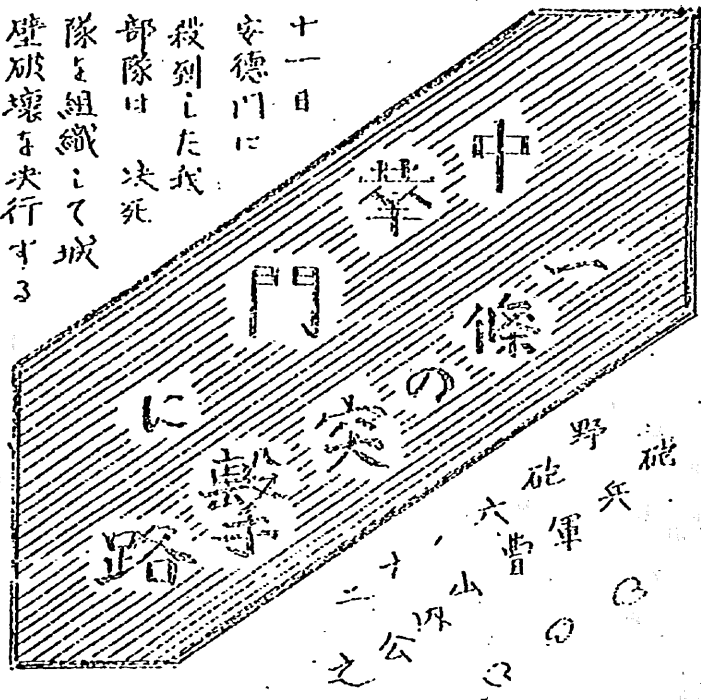
南京城西南角に高々と日章旗が、續りま

した

中隊長以下双手を挙げて、感激の萬歳を

叫びつゞけました

十一日
 安徳門に
 殺到した我
 部隊は 決死
 隊を組織して城
 壁破壊を執行する
 ことになりました
 闇にまぎれて出発しやうとしてある私達の
 分隊に向って 中隊長は
 「砲口を城壁につきつけて 射つのだ」
 と働ませられました



空には星がキラ／＼と輝いてゐる 第一、
 練方方には銃声がかひつきり居たにこそおま
 下
 友軍歩兵の歩哨線が通過すると 銃聲は固
 近です パン／＼と音がする度にあら
 リが明りくなる採り気がします
 風を切つてとぶ弾丸の音がいやに頭にムン
 きます
 車輪には蒸氣を巻いてあります 轟かせ
 いか音が 晝間の音より高い採りに聞えます
 馬は後馬一併ですが 夜風に乗つて
 カツ／＼といふ音が 闇の彼方へ流れて
 行きます
 その音を聞きつけたのか 又淡い星明りで
 発見したのか 敵弾が愈々近く激しくなり
 ました
 正面に 道路の両側に パツ／＼と火を吐

0544

96

く小銃機関銃が無款です

私達は今あたるか 今あたるかと何時しか
死を待つ氣持に存つて居りました
やがて城壁は 三百か四百位の位置に到着
して放列を布きました

城壁が周の中に魔物の様に黒々と聳えてお
る 残弾僅かに五十二發 これで城壁を破
壊し取り小はならぬのです

敵陣は夜が明けると共に 更に猛烈になつ
て來ました 倒れた電柱の乱れた線に當つ
て まるで弦樂を奏する様です

彈雨にさらされた私達は どれだけ射撃命
令を待ったでせう

とうとう 朝が來ました 城門も城壁も目
前です 城壁上に動く支那兵の姿も手にと
る様です

待望の命令は下されました

號令一下 巨彈は物凄いな唸を發して城壁に

炸裂する 一發二發三發と数を増す毎に破
壊口はだん／＼大きくなる 僅かの彈丸
は盡きてしまふました 然し一ヶ所ではあ
るが一條の突撃路が開かれた

未だ歩兵は進出して居りません と城壁の
方から半数は銃を持ち 半数はこの空白に
裸体で 濡れた軍服や梯子を擔いで友軍が
來ます

私達は今迄私達より前線には友軍は居ない
と思つてゐたのに 近づくて見ると工
兵隊です

昨夜勇敢にも敵中を通り抜けて 城壁下の
壕に橋を架けて來たと言ふのです 人間業
とも思はれぬ 勇敢さに私達は感心して

頭が下りました
やがて歩兵部隊は彈雨の中を 猛然と突撃

路に向つて進軍しました。戦友の屍を乗り越へ、乗り越へて

十二時頃迄に幾度か立てられた城壁の日章旗は、その度に倒されたが、遂に四十七聯隊の三明隊の手に依つて完全に占領されました。

翻翻とひるがえり日章旗の下に人柱となつた戦友達は、未だ瓦全、こつてゐる私達を許してくれませんか

勇士の涙

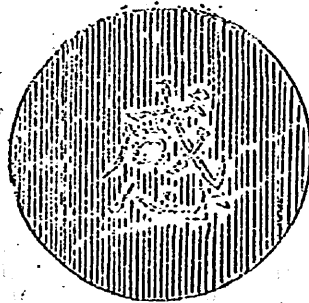
野砲六ノ十二

砲兵伍長 永岩 才藏

十一日の夜、自分達の中隊は明朝の城壁破壊の決死隊に参加するために、諸準備を整へておきました。

敵は一刻の体なく射撃をつゞけておきます。初巻の熊尻は骨を刺す様に冷い。夕方から自分達の後方で焚火をこいておる者があり、十行つて見ると五六人の兵隊が居る。その中の一人は上衣をひつかけたばかりの裸体です。そして泣き乍らボリ／＼話してゐます。傍で話を聞いてみると、工兵一ヶ小隊が城壁直前のクリークに決死架橋作業中おぼろむ。月光に照らされて、敵によく見えるらしく、猛烈な掃射を浴せるので作業は捗らず、全員首迄水に浸つておるけれど、敵の射撃は適確で次々に戦友がやられる。早く完成しなけれは明日歩兵が突撃する率が出来ぬと、非常に残念がって話つておりました。自分はこの話を聞いて工兵隊の労苦が大変なものであると思ひました。翌日式猛攻にさしもの南京城も陥落したが、あの工兵達もどこかで戦友の仇を報いたでせう。

南京落城



の 激

野砲六ノ二
砲兵軍曹 西郷 正三郎

午前三時前起床 突には星がキラ／＼か
やいてみます
あちこちと 敵列陣地を偵察して 中葦川
攻撃の準備を急ぎました 午前七時頃より

南京城直前のトーチカ陣地に巨弾を浴せ

こ水を破壊しました

歩兵第一線は十二時頃 私達のすぐ前の小

山を占領 中葦川に向つて進軍を開始しま

した 私達はしばらく砲撃を中止しました

南京城は敵列の眼下に見下さ小 射撃は

悉く命中しました

身近に飛来する銃弾は私達の志氣をど／＼

ます

紫金山上を通過して 南京上空に飛来した

友軍重爆撃機教台は 城内からの熾烈な

地上砲火を犯して 痛烈な猛爆を敢行 銃

砲声の合間に聞える轟轟音 私達は胸のあた

かまりがす／＼と抜けてゆく保身気持がし

ます

任務を果した荒鷲は 地上の争斗を知らぬ

中に悠々と雲間に姿を消してしまふました

十二時二十分頃 歩兵二名が城壁を攀登し

のが砲煙の間に蟻の様に見えます。私は夢
中で眼鏡にしがみついて一生懸命に見て
みますと、揚った血で染めた林
を真紅の日章旗が城壁上にバタ／＼と
翻つておます。私達は一音に

「高々々々」

と叫びつゞけました。

野砲 十榴 十五榴の霰中射に 中萃門の
仁勇の壁額は勇は紛碎され 仁の一字がこ
びしく残つておます。

一時半頃重爆薬三機 戦斗機一機 南京上
空を旋廻し 中萃門附近の城内に巨弾の雨
を降らせ 城内は各所に火災を起し 黒煙
は朦々として南京城を覆いつておます。

午後二時十榴はよか人に左端城壁を破壊し
ておます。歩兵部隊は中萃門に殺到してお
ます。

敵はまだ軌初に反撃を繰返しておる様であ
ります。私達も前進する筈です。銃砲声は
いつきりなしにしておます。

中萃門口よか人に炎上しておます。
連続射撃を繰返してみた左方にトヤ／＼と日
章旗が揚りました。

これで中隊長殿の仇を報する事が出来まし
た。私達の感激の涙にうるんだ目に 黒煙
に包まれた南京城がぼんやりかすんで見え
ました。

汗にまみれた戎衣がやみど

中に花散る大和魂

治久

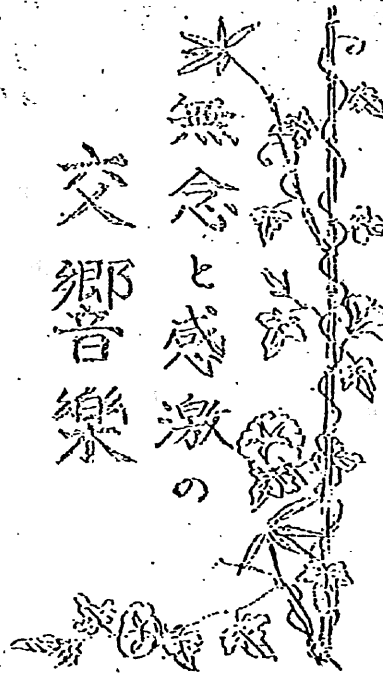
野砲六ノ二 榴弾集より

0548

102

交響音楽

無念と感激の



野砲六ノ六

砲兵曹長 長野 喜誠

南京攻畧戦の第一日 敵は地の利を遺憾なく發揮して 牛首山附近の高地一帯に陣地を構築して 前進せんとす。我軍も 側方より射撃して 却々私達も苦戦しました。

敵の砲兵は豫め要所に試射を完了し、あつらひしく 初登より友軍陣地の真只中に落下し、犠牲は刻々数を増してゆきます。

私は敵弾と喧嘩する氣持で 當れば當れば張り切つてゐました。 却々攻畧出来なかつた牛首山に 敵圓柱草に火を放ち 火及煙に苦しむ敵を刺突する。 友軍歩兵の突撃を眺め 勇気を叫び 火攻めも却々復讐を戦法の一つだと 感心且欣へられるところ大でした。 さしも頑強だった敵も 我圓弾戦にもろくも破れて 或は殺され 或は退却して 私置は南京郊外の鉄心橋に前進する軍が出ました。 その時の兵隊の足が軽いこと 正に南京城を奪んだ 心よい軍樂の音でした。 その後長い同度々戦斗をつゞけて來ましたが、あの時程 兵隊の足並の軽かつたのを見受けず 事はありませんでした。 もう後一息で待望の南京に入城することが出來ると勇み立ちました。

0549

103

然しその後の戦いは一進一退で遅々として進捗しませんでした。西花合要塞の巨砲は容赦なく友軍陣地に落下して、予想を裏切った激戦です。此の頃より友軍機はさかんに南京城を爆撃します。城内と思はしき方向より牽射する高射砲弾は、機の前夜左右上下に曳火して私達を冷々させました。却々命中は致しません。城内には敵高射砲が配置され、水あるを思ひ、本格的近代戦が展開せらるゝと想像しました。

一日二日三日と戦い進捗せず、敵と対陣したまゝです。其の間にも傷れた多くの戦友達が附近の野戦病院に運ばれます。

此の戦半状態に入つて三日目の夕方より附近に露営中の獨立工兵隊より決死隊が組織せられました。なにもかも新しくい敬服を乞んで、宵暗迫る頃一同整列し、決死隊に選ばれた約四十名は工兵隊長の最後の訓

示を聞き、戦友と別れの水盃を交し、国歌が代を合唱。陛下の万歳を三唱して笑つて勇ましく死地に赴く。その偉大なる武人の精神に深い／＼感激の流が何時か頬を流れてゐました。こ人も勇ましい武士道精神に持ち、生来始めての偉大な感激に、男中の踏む道を深く悟り、戦友の成功を祈りましたが、悲しくも不成功に終り、四十人中殆んど戦死して、僅かに三名傷つき生残つたと聞き、残念の情は五尺の体内を駆け巡りました。

此の決死隊の任務は二回ぐらゐの草の先に爆薬を築き、敵のトーチカに迫りつき、曳火して爆薬をトーチカ内に投入して一撃にトーチカを爆破するものです。

此の決死隊は次の日の夕方、又縮成せられお茶しました。やはり全部は成功せず、三分の一は成功と聞きました。又次の日も

0550

104

同く決死隊が編成せられました

此の日友軍歩兵一ヶ中隊は一一〇〇頃前面

に並ぶトリムカに決死突撃を敢行して歩

兵中隊は数十名を残して他は全部護国の

花と散りましたとか 戦友から聞き感激の

連続でありました

此の突撃前に忠告以来慈父の如く 親しみ

敬って居た藤井中隊長殿を敵弾は奪はれ

残念で 仕方なく まるで夢の如く出

来事には 艦裡の整理も出来かねる程の激し

い悲しみがつまみました

あの高地一つ越せば目標の南京城が見え

と 部下を勵まし中隊長殿も張り切つた

たのに どう 首都南京も見ずして靖国

神社の神となられたのかと思いと どうし

ても誇りの為は出来ませんでした

尊い人々の死によって さしもの堅陣地安

徳門も奪取する事が出発しましたが 中隊長

殿を失った事は限りなく悲しいものであり
ました

そして此の日夕方 炎々と燃え上る南京

城を右手に眺めて安徳門西南高地に陣地占

領しました

次の日から雨花台の攻撃で 猛烈な激戦と

交へ 小を果敢しました

最も記念すべき昭和十二年十二月十二日一

二三日 精銳六師團の歩兵四十七聯隊の決

死突入した勇士によつて 感激の日章旗が

城壁上に掲げられ 陣地の此處彼處から朝

せすして起る轟々の聲は 天地に轟き 南

京城を圧しました

さ小ども悲しむ吾等の中隊長殿は 此の情

景を遂に見ることあたはず 部下たる私達

は只一日此の光景を故藤井中隊長殿に見せ

たかべたと 又しても燕念の涙にくれまし

た

南京落りたれど、この感激をわかつ人なき
 に、感激と無念の情交々至り、中隊將士の
 心中悲しくも寂しき極かでした。
 白雪に覆はれた正月を、固道にかかえた。十
 二月末旬の一日、部下と共に故藤井中隊長
 殿の墓標の下にたゞすんで、心から冥福を
 祈る姿は又哀れでした。南京郊外の野原に
 さびしく立つ一仞の墓標を見つめてゐる私
 達の脳裡には何語直も、も、亡き藤井
 隊長殿の御姿が画かれてゐました。
 花一枚手前り人にも、冬枯の白雪の野原に
 は野花一本も見出されず、私達を捧げ、真
 心は必ずあがつてしらすと、墓標に別れ
 を告げて勝りました。
 此れから二年有半の歳日は流れました。今
 尚ほの日の悲しい情景は忘れず夢加出来ま
 せん。



演藝會を形は

いつも手拭で

章了

やつたことのある

すゝん髷の立廻り

清一

大人と言はれ

思はず胸をけり

一夢

敵前や眠る

縋り大公望

豆助

補充兵隊々々

先ずおぼえ

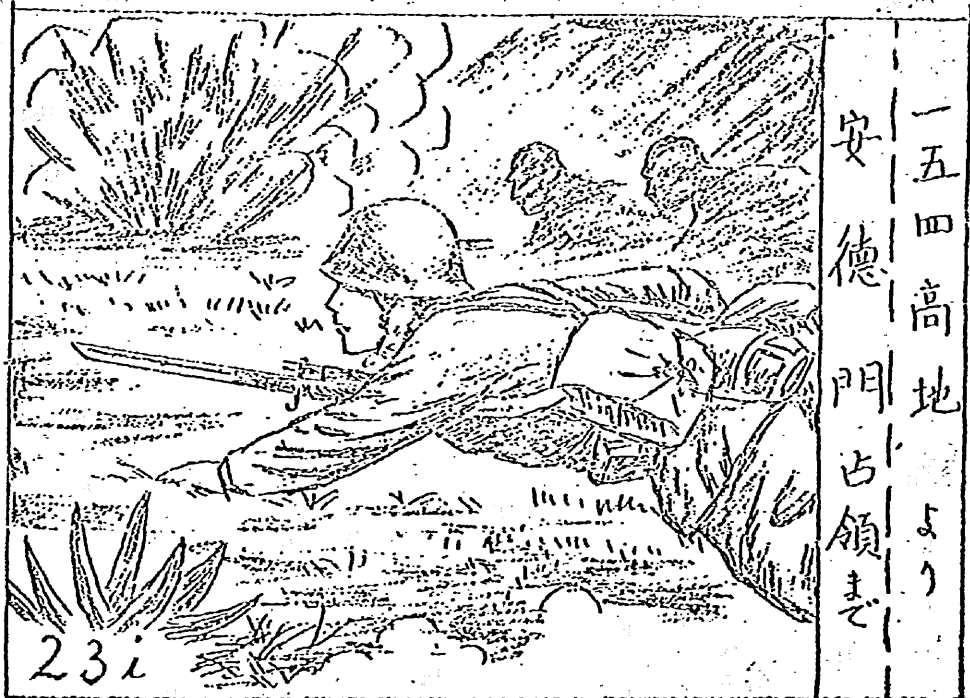
斗凡

野砲六ノ二

彈薬より

0552

106



一五四高地より
安徳門占領まで

<p>鬼隊長殿にも涙あり 歩三ノエノニ 歩兵中尉 田畑栄心</p>	<p>手榴弾と天佑 歩三ノエノニ 歩兵中尉 川野 勝</p>	<p>安徳門附近の戦鬪 歩三ノエノニ 歩兵中尉 河野 嗣雄</p>	<p>恨は深し安徳門 歩三ノエノニ 中尉 紺家 政男</p>	<p>勇猛果敢英皇隊 歩三ノエノニ 歩兵中尉 紺家 政男</p>	<p>もくじ</p>
---	--	---	--	--	------------

勇猛果敢な突撃隊

歩三三一

歩兵准尉 紺原政男

南京を去る西方五里 板橋鎮東方一五四高地
地には 蔣介石が相当の時日と労力を費し
て築いた警戒陣地がありました

約三百名の敵警戒隊は 地の利を得た一五
四高地に據り 我が駒沢大隊の攻撃に一歩
も譲らず 此の據拠を死守して 牛首山よ
り未だ敵敵を憚しと南京城内に收容して
江北に退却せしむべく 頑強に抵抗を続け
て居ました

杭州湾上陸以来 悪路とクリークに砲の運
動は遠ざらぬ 大隊は一門の砲もなく 唯
頼みとするのは重擲弾筒のみで 歩機

協同に依って今日まで戦いを続けて来まし
た 愈々此の敵警戒陣地を奪取したならば
南京の主陣地攻撃です 砲はなくとも機関
銃と擲弾筒の掩護下に最後の戦術自兵戦あ
るのみ 今こそ南京城頭日章旗の下に死す
べき時です

戦いの座にたつ身の誰も狭し

必死の眼らんくとして

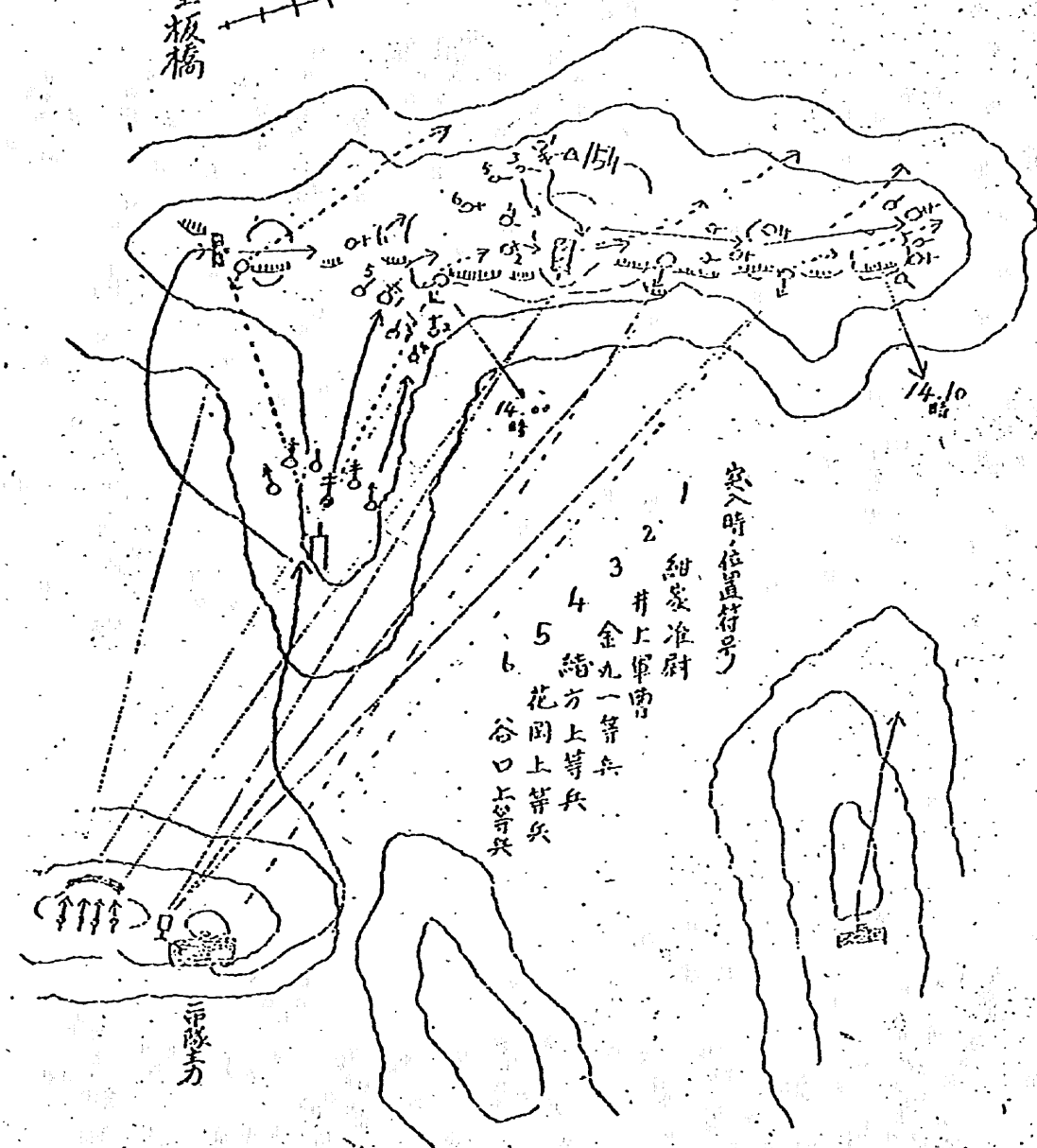
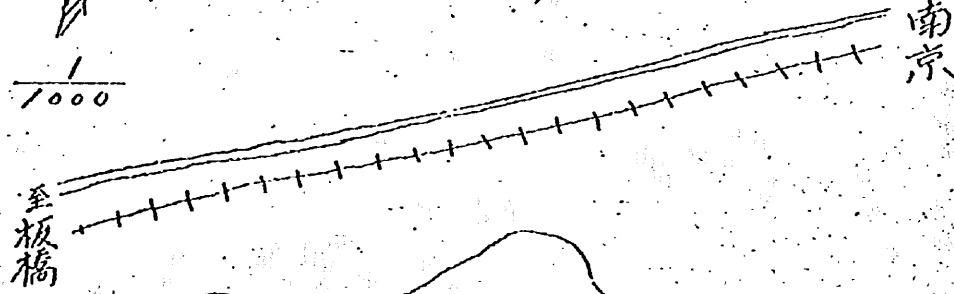
最後の奮闘を試みるべく決心すると 小早
瀬敵も眼中にありませんでした

。ハ。 一小隊は一つの高地を占領しま
したか それよりは一歩も前進出来ません
駒沢大隊長殿は この高地を奪取して志
近 牛首山より敵敵の退路を遮断すべく
命せられました 第三中隊は石第一線 第
三中隊は左第一線で 整備隊としては一小
隊あるのみ 第一中隊(一個小隊大)第四
中隊は 砲兵及び大小行李掩護のため追及

中でありました
一〇〇〇頃 中隊は一五四高地南側の高地
を占領しました。そして午前中敵の火兵と
地形を偵察しました。一同は高地奪取を命
じられた時は口を揃へて喜びの声をあげま
した。溝口中隊長殿の奪取計画に基づき、私
は協力機回銃と既属された擲弾筒一分隊に
連絡しました。擲弾筒分隊の兵は幸ひにし
て私が教育した兵でしたので
、しつかり頼むぞ、さあ今から試射だ
と陣地を選定して試射しました。射距離を
決定しました。高地まで五百五十米
「よし、俺が日の丸を持って突進するから
日の丸を左右に振ったら目標変換、射程
延伸だ。中止はかける(×)だ。必ず奪取す
るから、たかむし
と念を押して、中隊が高地脚に集結してお
る地裏まで進及しました。ところが敵も愈

我々に突進するものと察したものが、火兵は
火を吐き、又手榴弾を投下して、容易に進
接することができませぬ
何しろ連日の急進に足をいたし、疲労し
ておますので、思ふやうに休む自由がき
ませぬ
私は
「なに、これからは戦争だ。この敵を退
しなればは南京城には向へないんだ」と
思ひ
「よし、俺が誘導するからついて来い。日
の丸の方に向つて来れば安全地帯だ
中隊長殿、組長が行きますし
と言葉を残して、高地のわけて、起伏地を
利用、極力敵射を避けながら、高地脚四五
十米まで進進しました。擲弾筒の射弾は標
高々地に命中しておますし、敵はたゞ啞然
としておました。

一五四高地奪取及急進戰
(十月八日)



0556 110

私は此の殺違すべからずと左手に日の丸をもち、右手に軍刀を引き抜き、敵の火薬目掛けて突入しました。敵は虚をつかれてぼんやりしてゐましたので、手当り次第に斬りまくりました。私の隣、花園、金丸の二人右より、井上軍曹、綾方上等兵左より谷口上等兵ついで突入して来ましたので、この五名を指揮しました。敵は狼狽して退却を開始しましたので、すかさず陣地深く突入を決めました。

「射撃をせず、つきまぐるのだ。続け」と壕上より壕内の敵をつきまくりつゝ、突進しました。

「さあ最高地だ。あの最高地を奪取すれば勝利は我々のものだ。各人油断せず突入しろ」と命じました。

ところが最高地の掩蓋からは火を吹き小癩にも壕外に千鳥口を出して射撃しようとして

ました。

何しろ私達突入組の位置判らず、おつ口にとられてか、手榴弾も投げ得ずに居るのを見て、私は

「それ、千エツッだ。金丸、今だ。手榴弾を」と大声で叫びました。敵はてっきりこちらが突入して行くものと思つたか、千エツコを引き込みました。この機を逸せず、金丸一隊兵の押収して来た敵の手榴弾は、掩蓋近く炸裂しました。

「コレッ、今だ」と掩蓋を包囲するやうにして突入して、掩蓋外の敵を刺殺し、斬りつけて所持してゐた手榴弾をもぎ取り、発火させて掩蓋内に投げ付けた。炸裂するや、後も見ずに陣地深く突入することになりました。

壕内に躍り込んだら、敵の手榴弾を奪取其を遠く投げて敵に塵隙を作り、斬り突く。果死半生のまゝ、後は続いて来る者に譲り

尚突入して行きました

壕内の敵は、後から押すなぐで逃げて行

きました。或る者は死んだ真似をして居まし

たが、餘りの怒しさに頭をもたげて見たい

やに、生きたらさう苦の生命まで、軍刀の柄

となりました。敵はもがき乍ら逃げようか

私達が斬り、突く間に二十米も距離が出来

てしまひました。又壕外から下向けに三人

逃げましたので、この野郎逃してなうも

かかると追ひかけて、後から襲撃がけに二人

斬りさげました。上手でもない私でも生命

ハやり取りでは先が美事と言つてよいかも

知れませんが

井上軍曹は距離が出来たので斬棄しようとし

ました。たか一登つ、射つたので、折角の

この突撃も、敵に與へる損害が少いと見た

私は「患つちや取日だ、さう駆けつこしよ」

と大馬力をかけて敵の後尾に追いつきま

した。ところが味方の擲弾の一発が近く私

達の附近で炸裂しましたので、日の丸を振

つて射撃中止の合図をしました。

午後二時高地前線をお領してから十餘分間

に、約千數百米に達し高地の敵百餘名を斬

りまくり、突きまくり完全に占領し、潰走

する敵に追隨射を浴せました。然し激動後

であるし、それに着剣してゐては命中がよく

ありませんので、剣を取らせて、狙撃させ

ました。

溝口中隊長殺は大きな身体をふうく言ひ

乍ら突入して来られまして

「今日先頭突入組御苦労だつた。とても

勇壯で、猛烈で胸がスウツとしたぞ」

と賞められました。この御言葉が何よりあ

嬉しく涙が流れました。中隊長殿の部下に

射する思ひやりが有難く、この中隊長殿と

ともに南京城を占領するのだと思ふとど
うすることゝも出来な、感動にうたひました
さうして愈々南京へ向ひ急進悪戦にうへり
ました



歩三三三三三

歩兵准尉 紺家政男

十二月九日、一五四高地を占領して猛進悪
した大隊は、其の夕方には南京城外四野の
小隊行に進出して、敵陣地に対する攻撃陣
備を致しました

師團主力方面の牛首山の敵は、夕方より陸
銃として南京に向けて退却して来ました、
大隊は一部を安徳門方向に、一部を小隊行

南側高地に在らし、敵退する敵の退路を
遮断すべく、全火力を並べて、其の制圧下
に突入の準備をして居ました

敵はこの討盡し知らず、縦隊を以て退却し
て来、我が陣地前五十米乃至百米にさしか
るや、我が軍の火を吐く機関銃のため、
バタバタと斃れ、右様左様瞬く間に屍が山
が築かれました

中隊は予備隊として高地脚の一軒家に盡か
疲れを休め、夜食をとり、明十日の南京城
外主陣地に対する攻撃を準備しました

敵も戦意を失つたとは言へ、首都南京城を
おめく、敵に激し蒸ね、下関より敗退する
味方の收容に死物狂の抵抗をうけました
其のため戦況進展せず、城内より落ち出す
砲弾は、我第一線と言はず、後方砲兵陣地
といはず、間断なく落下して損害甚かりず
駒沢大隊長を始めとして多くの将兵は斃

此等は傷ついで行きました
然し乍ら敵首都南京城を見ては益々士氣
昂々ばかりで、歩一歩と敵の堅陣は我が手
に歸しし行きます

中隊は夕刻になり、安徳門高地を占領すべ
き命を受けましたので一同大喜びしました

安徳門高地は蕪湖及上海より来る三又呉

の高地で主要な最後の據点であります其

のための敵は必死で抵抗を続けます、主陣

地は、二條の屋根型鉄條網と、一連の戦車

壕、それに鹿砦を繞らして、この障礙物に

か、れば側方火の集中射撃を受けおぼなり

ません、又陣地は交通壕を網々やうに張り

、之に火兵を運んで、我が銃火に耐しては相

当の抵抗あるを以て、敵なから頑強に抵抗

をついで居ります

此の堅陣に突撃して占領しなければなりま

せん

中隊は先づ薄暮を利用して、障礙物を破壊
し、高地の一端を占領して、戦果を拡張すべ
く、第一小隊第一線とし、障礙物近く進む
やう努めました

先づ發煙班と破壊班を進めて、中隊の擲弾

筒を以て高地前線の敵第一線陣地に制圧射

撃を実施しました、この制圧下に、先づ發

煙班は發煙筒に点火して煙幕を構成すべく、

敵射撃の中を鉄條網近くに進進、身に負

傷しましたか之に松まず、敵陣地にかけて

發煙筒を投擲して、完全に一條の煙幕を構

成致しました

破壊班は之に追隨して、敵の投下する手榴

弾の破裂の中に鉄條網を破壊して、一條の

突撃路を開設しました

敵もさうもの、我が擲弾筒及輕機銃の制圧下

にあって、手榴弾を投擲し、破壊班も亦二人

傷つきましたか、突撃路になり、敵の窟を

0560

114

窺つて居ました

田尾小隊長殿は突撃路開設せよを見よや
軍刀振りかざして小隊を指揮し、安徳門
高地に突撃を開始されました

敵は瞰射及手榴弾投下に依り我が突撃を退
避すべくうとめましましたので、敵弾のため
一人二人と傷つきましたか、何小癩なれど

發、士氣昂り、彈丸を潜り、遂に高地第一
線を占領して、抵抗せよ敵と自兵戦を交へ
て之を果敢に占領致しました

敵の執拗な抵抗のため、小隊長田尾少尉
殿は、左眼に破片剣を受けて指揮困難とな
られました。剛毅な井上軍曹は之に代つて
小隊を指揮して、一角を完全に占領致しま
した

私は戦況如何にと察じて、傳令一名を連水
て高地に次いで突入して見ました。右の
報告に接しましたので

井上軍曹、細家が代つて指揮するから安
心せよ
と告げました

敵は逆襲につぐ逆襲を以てしますので、暫
しの間戦死傷者には気の毒ですが、確保に
努め勵まして、中隊主力の来るのを待ちま
した

噫、悲惨なる戦場に於て部下の戦死傷者を
見ては、一時でも早く安徳門の敵を徹底的
に東滅して仇を報いてやりたい、気が気で
はありませぬとした。然し小隊の兵力四十
名足らずのところ、数名も傷つては、堅
陣に據る敵をさうたやすく東破し得ません
ので、中隊主力の来るのを待つことにしま
した

中隊長殿が来られましたので、現況を詳に
報告して

現在の地味にては不利で、是非今夜中に

0561

115

安徳門高地を占領しなければ 明朝敵の
集中火を受けて 全滅に等しい損害を受
けねばなりません 一度占領した高地を
放棄したならば 敵はこの弱兵につけ入
り 此地を突破して逆襲するでせう 一
うなれば大隊本部は近くであるし 大隊
全隊の戦況逆轉し 汚名を残さねばなり
ません 私としては是非とも残存する部
下を指揮し 全滅するとも突蕪夜襲して
必ず占領して 高地より南京城を眺めて
砲兵の観測所たらしめねばなりません
と意見具申致しました

中隊長殿は

「大隊長より君の意見の如き命令を受けて
ある 自分も同意だ 然し今すぐと言ふ
訳にはいかぬ 戦死傷者の始末をし 弾
薬を補充し 充分敵陣地火点の状態を偵
察した後 十二分に腹ごしらへしてから

か、らねば駄目だ
と私のはやる心を鎮撫されました 我が存
する隊長より一言一句は 良く私の心衣
に込みました

そこで一同は、数名よりなる敵の逆襲手榴
弾の中に悠々と夕食をとりました 何しろ
夕食の準備もありませんので 乾パンを食
ひ食ひ 残りの飯で腹をこしらへました
十二月十日といへば 月光淡々とて ほか
かに敵の動くのが見受けられる薄暗がりだ
した そして寒風身に込み 身も心も引締
つて来ました

敵の放棄した外套を被つて 中隊長殿と計
畫を進めました

午後十時前 各人の準備弾薬の補充も出来
ましたので

「中隊長殿 たゞ今より突蕪します 必ず
奪取致します 側方を頼みます」

と言葉を残して

左突撃隊

私の指揮する輕機一隊 擲弾筒一隊
分隊 右突撃隊は井上軍曹の指揮する輕機
一隊分隊 小銃一隊分隊

この兩突撃隊は午後十時を期し 發煙筒に
突火して煙幕を構成し、起伏地を縫つ
て 敵の火兵に突入しました

この時私は支那兵の遺棄した外套を着て
敵兵に化けて突入しようとする時、間に気が
つき着用のまま突入しました

敵は我が勇壯な突撃に逆襲しかねて 火炎
に據り抵抗し 手榴弾戦 白兵戦を演じつ

つ敵の火力急襲を身に受け乍ら陣地深く突
入しました ところが敵陣地中央突破なの
で 敵の銃火激しく 次々に味方斃れ 或
は傷つき 残りは十数名となりました

右突撃隊長井上軍曹は 頭部貫通銃創を受

け乍ら指揮しておりましたが 遂に壯烈な戦
死をとげました

それで連絡係たる緒方上等兵が之に代る指
揮しました

左突撃隊はと見れば 私は突撃途中敵手榴
弾の破片に右大腿部を身傷し 右側を掩護
しつゝ突入しました 第四分隊は殆ど全滅
しまして 激戦入乱れての混戦に 一時は

此処が最後だと肚をきめて力戦苦闘致しま
した

此の兵力では最高地奪取はおぼつかないと
判断致しました私は
「現占领地を確保して 一歩もこの占领地
を敵に返すな 此処が最後の地だ死守
せよ」

と絶叫して 無念 半にして突撃を中止し
なければなりませんでしたが 必ず奪取する
と誓って突撃した私は 多くの部下を傷つ

0563

計畫半にして我も傷つき 嗚呼ならん
らことぞ 敵もし我が安樂の不成功を幸と
して大逆襲して来たならば よし我が身は

安徳門の露と消ゆとも

部下を死なして何の申訳があらうかと心を
勵まして立たうとしますか 出陣のため
戎衣も濡れ 身の自由がきません

何のこれしきと心はほゆりますか 我
らは才數名 しかた疲勞困憊した部下 彈
藥とても欠乏した今 決死安樂ありのみと

潔悟はしましたかの、 多聞偵察せず地形
未知なるため如何なる障礙大落ありやもは
かり知られず 敵陣境を考へる時 一先が

此の地に停つて 安樂再襲を決行するを最
善と思ひました

私は残存せる部下を勵まして 敵の逆襲に
備へつ、 散兵壕を握ること奉命しました
中隊長殿が業せられてやられた傳令花岡

上等兵がとんで来たした 私
花岡安樂が高し

と當かも終らぬうちに 敵側方火の爲に胸
部を貫かれ 其の場にどつと倒れまし
た 私はその起伏地の蔭に引ずり込んで

かりました 上等兵は駄目だと氣付いてか
残念だ 天皇陛下萬歳
と叫びました 私

花岡 残念だらう 若しいたらうか 此
処で声を出しては 敵が我々に損害多し
と判断し逆襲する お前はかりではな

皆傷つて居るのだ 我慢しろ お互
に今夜こゝで枕を並べて死ぬのだ それ
が約束だつたではなかい

と慰められてやりました 餘にも惨酷なや
うでしたか 反縮せず傍に寝かしてやり
ました

私も戦斗の一時を見て 卷脚絆を解き 自

再び繼續して指揮を続行しました

然るに敵も死闘 我も亦死守 敵の逆襲は頻々として繰り返され 我が弾薬も盡き果

て、しまひました

これではと一名を中隊長のもとに走りせ

現状を報告させると共に弾薬補充をたのみました

連続的射撃の爲に軽機は故障を生じ 敵手

榴弾の破片を受け 砂塵を振り 急ぎのま

ま機熟するを待ちました

右突撃隊からは

「准尉殿——敵逆襲し

とひとり叫ぶ緒方上等兵の声か 銃火の中

に聞えろのみでした 私

は

と気が気でなく 又私の附近を見れば 第

四分隊二名傷き残りたるのみで 後は銃を

並べて全滅 第二分隊長 永井伍長に

「此處に手榴弾二発ある これは最後に我
が突撃の全滅を期して突入する時使用する
ものだぞ」

と喜び合めて 私は軍刀を抜いたまゝ置い
て 決死の準備をしました

兵力の消耗と弾薬不足は私が失敗に近、突
撃を敢行したに依るとは言へ 戦場に於て

弾薬の欠乏ほど 食ふや飲まずよりも淋し
い心細いものはありません

私は足を引ずり乍ら敵を監視し 斃れた部
下に合掌しつつ、弾薬を取つて軽機手に渡し

ました 今はこの小遣と決心の膽をかためて
斃れた兵の銃を執つて 敵の火口に對し

月明の中に狙撃を続けました

小部隊の逆襲には壕内に身をかくめ 近寄

らば突撃 一発の弾丸も決して無駄に使つ
てはならぬ 予備隊が来るまでだ それ迄

頑張りなだ 少し位か負傷なら立て 我々の

最後の御奉公の時

か来てゐるのだからね」と涙と共に声をは
けまして部下を元気づけながら、悲壯な決
心のもとに苦闘を続けました

中隊長殿は傳令花園が帰らないうので、紺屋
小隊は全滅ではなしかと心配されて、予備
隊約二個分隊足らず（色、掩護其の他に決
意されたため）それに機関銃四銃を指揮
して、第一線に突入して来られました。此
の時はどんなに心強く思ひ喜んだことか
予備隊が来た、弾薬が来たし
と叫んで、中隊長殿に逐一状況を報告しま
した。そして安徳門中央高地を確保するこ
とになりました

私は
「中隊長殿、多くの部下を傷つけ、又お誓
ひしたことも果し得ず、此の惨状、中隊
ありません、必ずこの失敗は後でお詫が

致します、南京城の一角は私の手で一番
乗りしますし

とお恕しを乞いました。処が中隊長殿は
「主陣地中央突破だから、初から、此の事
ありと覺悟してゐた、敵は断末魔のあか
きで、如何に状況変化するかも知りし
ないから、御苦勞だが南京城を陥れ、迄
奮闘たのむし

と穿ら慰められ、元気づけられました
敵は我が兵力寡少と察知してか、此の地を
奪還すべく逆襲又逆襲、敵味方相次いで驚
れて行きました

嗚呼、戦場の惨状、ルかし如何に惨状を呈
しようかと、敵の據拠安徳門高地奪取せずに
置くものがかと更に念じつゝ、命を天に任せ
て苦戦を続けました
多数の犠牲者を出しましたので、之が收容
を頼みましたところ、隊の携架兵及衛生隊

の一部が弾雨の中に駆けつけて、仮纏帯も
弾丸が中しと戦友の敵にあさやうに、中隊
の衛生兵と共に活躍してくれ、次第に手当
が終り、後送しはじめました。先づ重傷者
次に軽傷者と、小頭を負傷者の始末も終り
ました。甚だ気の毒乍ら、戦死者は弾丸の
当らぬ地帯に或は壕内に入れて戦友をわけ
ておきました。

此の頃恒吉小隊も第一線に増加し、中隊
全員がそろひました。
中隊長殿は

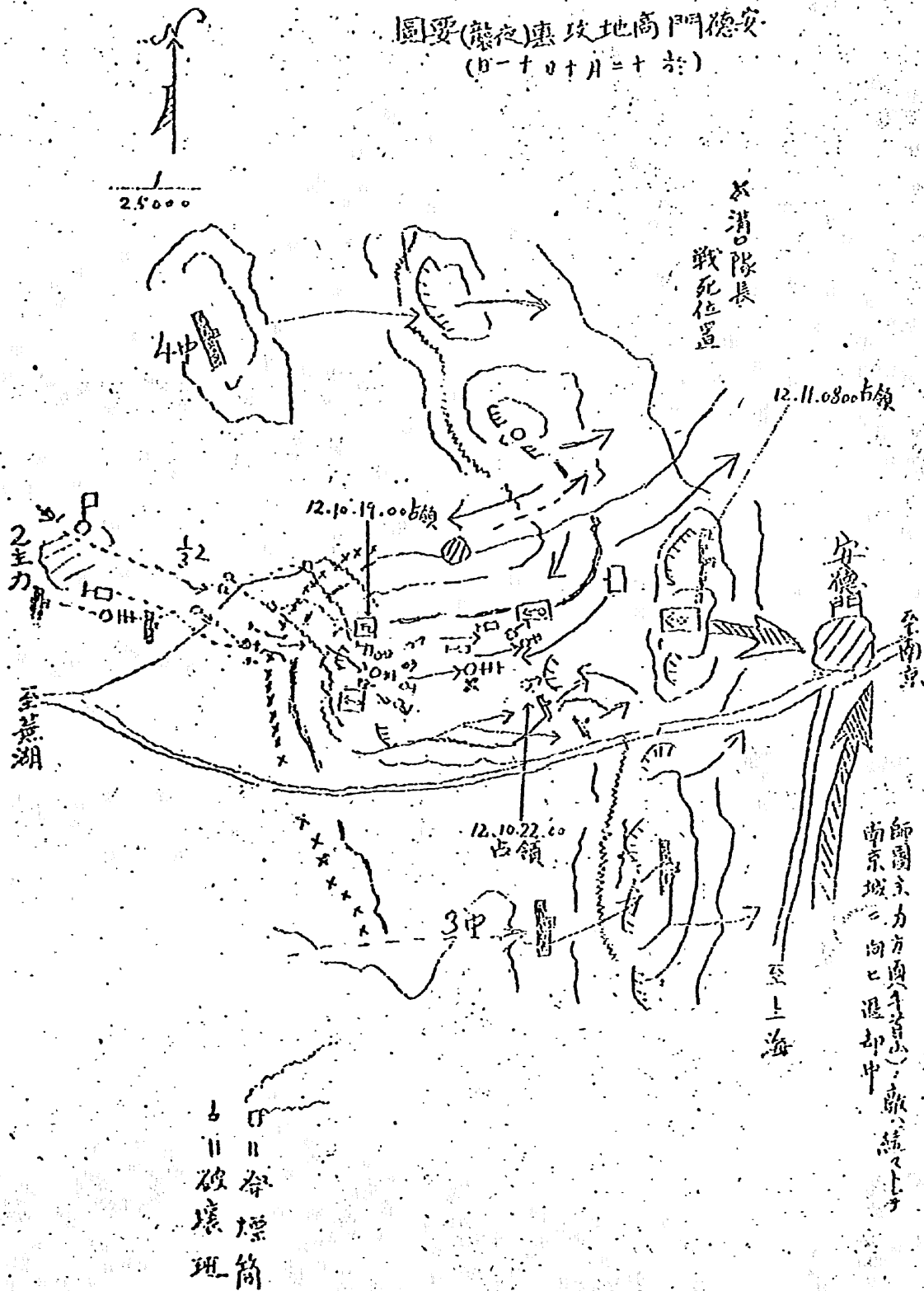
今夜此処に枕を並べて死なう。此の地を
渡しては明日の戦斗に、いや今夜中隊共
力は、敵の出様に依り惨敗の憂を自ずみ
なければならぬ。よし
と書はれました。私はこの中隊長殿の
氣持を察し、勇気百倍しました。
午前三頃だったと思ひます。余り出血が多

いので喉が渴きます。夜間明けは、と思
ひ乍らも、終夜敵に對して命を十分養ひを
休める暇もない兵隊の士氣を鼓舞する為
一つには敵に之は油断はならぬと恐怖心を
抱かしむる為、叫びを聞いて指揮して居
たためか、なほ更渴いて仕方ありません。
それと倒の永井伍長に

「永井、肩をかこせ。自分も右腕に破片創
を受けてゐる。然し大丈夫だから、心配
せず。君に左翼をさし、かり頼むぞ。」
と教へて、私は中央に位置しました。
餘り出血すると、疲労の上にも疲労するが
らと思ひ、船山衛生兵を呼び

「戦死傷者の始末はすんだかい。喜松
の軽傷者が二三名残つて居るばかりです
それとすぐ擔架が来ますから、
ときかされて、こ水でよし、こ水から再び
突いて入るのだ。その為には、仮纏帯で出

圖要(敵夜襲攻地高門德安)
(日一十月二十年六)



0568

122

血を止め 自由に立上る準備が必要だと
衛生兵には、他言すなれと口止めして論
帯させました 右手は敵の外套を着て突進
したために、ほんのかすり傷ですみました
夜は次第に更けらるにつれ 静かさと暗さを
才して行く かと思とるの静寂も敵の逆襲
に破られ 銃声と手榴弾の炸裂の音にかき
乱されます 十数回に亘る大小の逆襲に際
まされ 漸く午前六時を迎へました

その夜明けだ

皆今少し頑張って爆を揺れ
と命じました 背嚢は後方におろしてみた
為、小銃の器具と 敵の遺棄した土工具を
以て 或は銃剣を以て、交互に敵を監視し
逆襲を要退しなから作業をつづけ 一晩も
せず 掃蕩の敵弾を避けざる為、爆を揺り
時期しました
明け方です 七時頃でせう 今暫くすると

砲兵の射撃が開始される その制圧の折も
利用して 愈々砲台の最高地を奪取する
のだと皆昨日来の疲れもすつかり忘れ
気込みました

押進戦 奪取 今度こそ我々が一番先だ
負けるものか と私語を合へておる時
中隊長殿が

「細象 右脚をやられたさうだね 大丈夫
か 何故黙つておるか」と叱られました
「何も心配はいりません ほんの微傷です
と答へました

さあ、かう言つたものの、立つて見れば
右脚の自由が利きません 無理に立上つて
試してみましたが 相当の苦痛をこらへな
ければ 歩行できませんでした 然し私は
多くの部下を殺し おもく後送されてな
らぬのか、おくれ乍らも 軍刀杖に南京へ
向か 精神力を以て突入するのだ 後二千

0569

米と決心しました

ところが中隊長殿は言はれませんでした

細家 本当に大丈夫か

ハイ 大丈夫であります」と答へました

無理しなくとも良いぞ

ハイ

一寸のつぐみ更に中隊長殿は

細家 諦めろ 杭州湾上陸以来 南京城

は一着亦りの日暮旅をうち立てることを

君と約束しておたのだが 今一息のこ

ろで 君は不意中の命 生命捨つたか

だから 養生して早く帰つて来てくれ

君には君の仕事がある 此の名譽の戦死

者の功績上中 員傷者の今夜の始末もあ

らし 又上陸以来の書類の整理も小程残

つてある

君が若し無理して 死のため再び中隊に

帰つて来ない時はどうするかと 此のおし

の中隊長の心も察してこれよ……
と夜められた

中隊長殿の心中を知らぬ私ではありませぬ

ごしたか 私としては 部下の仇を報し

この程から罪 部下を死ねた罪は百し

をしよう決心しておたところでしたので

つか酒蒸らうとしました

然し中隊長殿の心中を察し 又自分の足り

不自由なため一人で一線の兵力を削減して

はと思へば 無念乍らも中隊長殿の言ひつ

けを聞かぬ証には行きませんでした

然し私はまだ 決心のつき業は

中隊長殿 是非連れて行って下さい 細

家は足を引く摺って行きます どうし

ても後送されたくありません

と涙ながら懇願致しました

細家 夜明にでもなると敵弾がとんでく

り 今が一着い、中隊命令ださか

と大喝されました。この中隊長殿にどうし
て言葉が返されませう。私は涙をのんで承
諾いたしました。

中隊長殿は

「無理しなくともよいが、自由が利き初め

たら、一日も早く帰ってきてくれ。」

と言はれました。

そこで私はつては書類をいじり自分の圖嚢を

取って渡しました。又南京城を占領したら

乾杯しようとい水筒に入れて居た支那酒を

悪いとは思ひ乍ら、自分は城壁攻めに参加

出来ぬ、い、こゝで祝勝を祝しよう、と一口

飲んで、水筒を傳令に渡しました。

中隊長殿、それでは今から退つて養生し

て、一日も早く進及します。十分気を附

けて行つて下さい。

と涙声で申し上げ、擔架の人となりました。

中隊長殿は怒言暫くして

「細波、ゆく、養生して来い。後は中隊長

が引受けたから安心せよ。」

此の時中隊長殿の顔には、悲壯な決心が

あり、と浮んでおました。

私は心を戦場に残して、衛生隊の擔架に運

ばれて西米後方の、前日夕刻突入した陣地

附近に退つた頭敵の安徳門及其の左右陣

地からの銃火は、第二中隊の占領する陣地

に集中しました。

私を運んで居た前の擔架兵は、其の場に甞

れしました。私は、御苦勞様、

と御礼を言ひました。他の擔架兵は

「准尉殿、背中が痛いかも知れませんが

我慢して下さい。」と言ひも終らず、擔上

に擔架を引ずり上げ、えして下りはじめま

した。そして安全地帯に辿りつきました。

0571

125

て 擡架兵のこととを氣遣ひ

大夫夫の 行つてみえくれし

と言ひまじたが

大丈夫です 准尉殿を運んで すぐ迎へ

に行きますがらし と言ひますので

では頼むと大隊本部の位置に運ばれま

した 大隊本部で高野軍医殿の手厚い手当

と慰めの言葉をいたゞいて後送されました

衛生隊の收容所に傷ついた部下と共に

中隊はどうなつたらうか 中隊長殿は又

部下は無事だらうかしらと語り合つてお

ました

十一日夕方 傳令がかけつけて

「准尉殿 中隊長殿がやられました

残念でありません

と泣作らにしろしえくれました 私が中隊

長殿の身を案じてわたしのを知つてみて 部

下が教へてくれたのかと思ふといぢらし

くも又有難く涙が溢れました

私は或る一瞥に横伏せになつて、人前も憚

り泣きました 嗚呼残念だ 何故自分は

死ぬか 後送を承諾したのか 自分が居た

ら或は……と今更乍ら本当に取返しつ

かぬことをした 残りはたゞ石田少尉殿一

人が 部下は噓心細く思ふことだらう

然し中隊の兵は中隊長殿の今日迄の温愛に

生き 必ず仇を取つてくれに違ひない

然し隊長がなければ或は予備隊では？ な

どとおれやこれや氣遣ふ矢先 繃帯をくだ

駒澤大隊長慰病院から飛び出され 大隊を

指揮されました

をして予備隊になつたので 隊長殿に折

返し

「南京城を占領するまで第一線として下さ

と再三再四懇願されましたが入れられませ

んでした 急念の涙を押し乍ら 予備隊

として行動してゐる駒沢大隊長殿以下の將兵
 の氣持が察せられて切齒いたしました
 安徳門高地を占領すれば後は下り坂 南東
 城は後二のロロ米…… 何故の予備隊か……
 私は刑隊長殿が第一大隊は戦死傷者繰出
 せうためと云はれたのを知つては居ても
 の、最後の花を持たしてこそ武士ではな
 いか その為には大隊が全滅に等しくなる
 とも それでよいではないか……と刑隊
 長殿を 部下としてあるまじきこと作り
 全く恨みました
 斯様に私の心は焦念で一杯だったのであり
 ます
 あ、思へば別れて来た時の中隊長の沈痛な
 面持よ、あれが満口中隊長殿との最後のお
 別れだったのか
 私は何と云ふ愚かな人間だらう 何故自分
 はあの時顔張り通さなかつたのだらうと

思へば思ふほどやるせな、氣持になり 中
 隊長殿の身に浸みか泣きに感謝し お徳の
 下す心で一杯になり 涙も出ませんでした
 部下に
 頼むよ 中隊長殿を大事に守つてあげて
 くれ それとして戦死された時の事を話して
 くれ
 とたのみました 部下は泣きながら
 准尉殿が後送されることすぐ
大逆襲
 がありました それで中隊長殿は
 敵の最後の抵抗だから 頑張りなご
 擲弾筒は逆襲部隊の後方を射撃せよ 其
 の他の者は頭を低くして 敵が近接した
 ら突撃だ
 と壕から頭を出して 敵情を監視しながら
 指揮して居られる時 安徳門右方高地より
 の側方火身辺に集中した為 頭部に貫通銃

劍を受けられ 壯烈な戦死を遂げられました

と話ししてくれました

此の惨状を知らしては 中隊の士気に闇ず
ると 中隊の傳令吉田上等兵は中隊長殿の
屍を大事に護り乍ら 傍に居る戦友と共に
中隊長殿に代って 大隊本部及小隊に情況
を通報して戦鬪を続行せしめました——と
聞かされた時 私はある田上等兵の処置に対
して感謝しました

たゞ一人残られた石田少尉を——中隊長殿
が呼んで居られます 来て下さい——と呼ん
んで来て 詳かに中隊長殿の戦死の状況を
話したとのことでありませう

私はこの悲報に接して 黒煙に包まれた南
京城を遙に眺め 一日も早く 今はいき中
隊長殿の御傍に帰りたいくなりませんでし
た 十百病院に収容されましたが 気が

でなく、十四日には 院長殿のお叱りを受
けながらも 無事退院して 中隊の軽傷者を
一人連れ 右足を引きずりながら

軍刀を杖に

南京城に向ひました
昨日に変わり戦場は寂として音もなく たゞ
惨憺たる光景を呈しておました 私には中隊長
殿初めとし 部下の戦死せる安徳門高地に
向ひ しばし黙禱を捧げ 南京へ向ひまし
た

後方部隊の中に入って押し合ひ乍ら 心淋
しく南京に入城しました せして早速中隊
長殿の靈前に慟哭しました 何と云つて良
いか 胸はつまり お詫びの言葉さへ出ま
せんでした

靈前に首を垂れながら 中隊長殿の遺烈と
遺訓を胸に これから自分の仕事は大き
いのだと 初めて 生前安徳門高地で戒め

諭された言葉の御心がはつきりしました
 靈前に額つき遺訓を堅く守り、決して
 中隊の名を汚しません。細家が生きてある
 限り人から指さ、れやうなことは致しま
 せん。必ず中隊のため身を粉にして働いま
 すし、とお誓ひしました
 をして暫く石田少尉殿と語りあいました
 中隊長殿を失った今となつては、私は大隊
 長殿のお頼み見たく、大隊長殿のところに
 杖を頼りに行きました
 大隊長殿は私の姿を見られりなり
 「お、細家、帰つて来たか、残念だつた
 よ、たのみにしてめた溝口大尉を失ひ
 金田大尉を失ひ、多くの部下を失つて
 なんとも申訳ないよ、僕はお前が帰つて
 来ぬかではないか、若し帰つて来ぬか
 たら、第三中隊はどうなるかと心配して
 きた、之で一つは安心が出来たし

とたり續りに話されました、そして私の姿
 を見て
 うっかりして来た、腰を掛りよ、杖はど
 うした、遠慮なく察までついで来い
 と慰められました
 私は感慨無量、涙がこぼれてどうすることも
 出来ませんでした
 北久忠登、松州瀆上陸以来、中隊長殿と語
 り約束して来た南京城攻奪も、二人共薙れ
 傷つて、賊を眺めながら、息を果し、涙が
 つたかと思ふと、残念、あゝ恨みは深
 し、安徳門、一歩進まぬ限りは、涙を流すこと
 でありませう
 南京といふ言葉をきくたびに恨み深くひしひ
 しと胸に迫るものがあります

